

『今昔物語集』の比較文体史的考察 ——訓点語「来タル」と翻訳話を中心に——

李 長波

1. はじめに

本稿は、表題のとおり、漢文訓読語とされる「キタル」系語彙¹について、上代語以降いかなる経過をたどって訓点語から和漢混淆文へ取り入れられていったのか、を記述し、『今昔物語集』における「キタル」系語彙の使用を考察する前半と、原典の移動、存在、出現を表す語彙、「来」、「有」、「(忽) 見」、「(夢) 見」、「不見」などの訳語を手がかりに、『今昔物語集』の翻訳者の翻訳態度、文体意識を考察する後半の二部から構成される。本文の構成と概要を以下に示す。

1. はじめに

2. 上代語の「キタル」

上代語の「キタル」の問題を取り上げ、平安時代に漢文訓読語として和語「来」と対立的な位相差を持つようになったことの必然性に触れる。

3. 平安時代漢文訓読語の「キタル」

主に「～キタル」の語形について、訓点資料に基づいて、原典漢文に用いられる「～来」の訓法を調査し、訓点語「～キタル」の用法を概観する。

4. 『今昔物語集』における「キタル」系語彙と「来」の使用

訓点語であった「キタル」と和語「来」は、和漢混淆文の中で果たして対立した位相差を持っていたかどうかを論じるが、その準備作業として、『今昔物語集』のなかの「キタル」系語彙の訓み方を決定するための手続きを検討する。

5. 翻訳話に見る翻訳態度、文体意識——「キタル」系語彙を例として——

『三宝感応要略録』と『冥報記』に出典を持つ翻訳話を対象に、移動、存在、出現を表す原典の語彙「来」、「有」、「(忽) 見」、「(夢) 見」、「不見」などの訳語の訳語を分析し、和漢混淆文の文体指標としての「キタル系」語彙の性格を明らかにする。

2. 上代語の「キタル」

「キタル」は、上代語では日本書紀歌謡（99 番）に 2 例²用いられ、万葉集では仮名

¹ 本稿は、単独用法の「キタル」、複合動詞後項「～キタル」の文体史的な問題を扱うが、必要に応じて、複合動詞前項「キタリ～」についても言及する。これらの一連の語彙を「キタル」系語彙と呼んでおく。

² 加羅国を 如何に言こそ 目頬子来る むかさくる 老岐の渡を 目頬子来る（書紀歌謡・99）
この例について、小林芳規氏は「この「来到る」は前文にある如く「到る」即ち到着する動

書きの例は、歌 9 首に以下の 10 例用いられている³。

- ・来りしものそ[枳多利斯物能曾] (八〇二番)【憶良】
- ・せめ寄り来る[勢米余利伎多流] (八〇四番)【憶良】
- ・皴が来りし[斯和何伎多利斯] (八〇四番)【憶良】
- ・春の来らば[波流能吉多良婆] (八一五番)【大式紀卿】
- ・春の来らば[波流能伎多良婆] (八三三番)【大令史野氏宿奈麻呂】
- ・春来るらし[波流岐多流良斯] (八三四番)【大令史田氏肥人】
- ・人来れりと[比等伎多礼里等] (三七七二番)【狭野弟上娘子】
- ・春は来れと[芳流波吉多礼登] (三九〇一番)【旅人】
- ・流らへ来れ[奈我良倍伎多礼] (四一六〇番)【家持】
- ・我が来るまで[和我伎多流麻弓] (四三二六番)【防人佐野郡の生玉部足国】

これらの仮名書の例については、小林芳規氏は、「この中にも「キ+タリ」とも解しうる例もあるが、「来る」の確例もあり、いずれも旅人・憶良・家持・宅守宛狭野茅上等既述の特定人か、旅人の周辺の官人である点で、訓読語の使用の可能性が考えられるのである」として、「漢詩文の素養深い歌人に訓読語が使われたとすれば、この語群がその周辺、関係の人々にも使われる可能性は存する。しかもこれらが万葉第四期の人々である」(小林芳規(1964: 41 頁)と指摘する。概ね従ってよい考えである。

しかし、万葉集では、「キタル」は「来」に対して異なり語数、延べ語数のいずれも劣勢である⁴。「キタル」は後発的な語彙であると考えられる。ただ用例数は多くないものの、語形には単独用法を中心に、「～キタル」、「～テキタル」の語形があるところから見て、普通に言われるような万葉語とは異なり、漢文訓読体としてすでに独り立ちできるだけの力を持っていたことが窺われる。しかし、「～キタル」形において、「～ク」に対応するだけの補助動詞的な用法を持ち合わせておらず、全面的な対義語の関係にはないようである⁵。次に、拙稿(2012)に基づいて、「～ク」の補助動詞的な用法の顕著なも

詞の意が明らかに存するもので、「来+到る」の複合動詞の音変化(母音イによる二重母音を避けた形)で、紀歌謡に多く用いられる「来」と同義語ではない。万葉集の「来る」は四段動詞として「来」の同義語として用いられており、それが位相差に基くと考えられるのである。四段動詞「きたる」の語源が「来イタル」であるとする(語研五五二)説と、万葉集における「来」の同義語としての用法とは区別して考えるべきであろう(小林芳規(1964: 47 頁)と述べている。

³ 木下正俊校訂 CD-ROM 版『万葉集』(塙書房、2002 年)によって調査した結果、「キタル」の用例は全部で 25 例あり、その内訳は、単独用法 18 例; 単独用法の主語は、「春」8 例; 「秋」2 例; 「夏」1; 「我」2; 「作者」(推定) 1; 「人」1; 「皴」1; 「月」1 例; その他 1 (抽象的なものか); 「～キタル」6 例; 「～テキタル」1 例。複合動詞の例は「継ぎ来たる」・「生れ来たる」・「せめ寄り来たる」・「帰り来たる」・「言ひ継ぎ来たる」・「流らへ来たる」1 例ずつ、「～テキタル」の例は「取りて来たる」1 例である。

⁴ 「来」の単独用例は 234 例。「～ク」の異り語数 87、延べ語数 265、「キ～」の異り語数 18、延べ語数 158 である。

⁵ 本稿は、「補助動詞」を、複合動詞後項のうち実質的な意味を失い、形式的な意味を表すよ

のを挙げておく。

A 先行動詞に対して、物の話者への空間的、時間的移動の方向性を付与するもの。

白たへの衣の袖をまくらがよ海人漕ぎ来見ゆ[安麻許伎久見由] (三四四九)

B 先行動詞に対して、話者への関係的な方向性を付与するもの。

月草のうつろひ易く思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ[事毛告不来] (五八三)
我が背子は幸くいますと帰り来て我に告げ来む[我告来]人も来ぬかも (二三八四)

C 先行動詞に対してその状態、作用の発生・進行とともに、話の[イマ・ココ]への求心的な実現を表すもの。

夕されば葦辺に騒き明け来れば[安氣久礼婆]沖になづさふ (三六二五)
梅の花枝にか散るとみるまでに見るまでに風に乱れて雪そ降り来る[雪曾落久類] (一六四七)

一方、「～キタル」の漢字表記を含めた 6 例は以下のとおりである。

- ・百種にせめ寄り来る[勢米余利伎多流]娘子らが娘子さびすと (八〇四)
- ・世間は常なきものと語り継ぎ流らへ来れ[奈我良倍伎多礼]天の原振り放け見れば
(四一六〇)
- ・住吉に帰り来りて[還来而]家見れど家も見かねて (一七四〇)
- ・神の御面と継ぎ来る[次来]中の湊ゆ舟浮けて我が漕ぎ来れば (二二〇)
- ・ひさかたの天の原より生れ来る[生来]神の尊奥山のさかきの枝にしらか付け (三七九)
- ・神代より言ひ継ぎ来る[云續来在]神奈備の (三二二七)

このなかで、仮名書きの例は「せめ寄り来る」(八〇四番)、「流らへ来れ」(四一六〇番)の 2 例だけで、他の 4 例も含めてすべて前項動詞に対して空間的、又は時間的な方向性を添える例と見てよく、すべて「～ク」の A 類に属するものである。「～キタル」は未だ意味的に十分「～ク」と重なるまでには至っておらず、補助動詞として接辞化していなかったのではないかと考えられる。一方、「～テキタル」の用例、

- ・大雪のあられなす乱れて来れ[乱而来礼]〔一云：そちより来れば〕まつろはず (一九九)

うになったものを指す用語として用いる。

を見てみると、異本のあるテキストではあるが、「乱れて」も「来れ」も関係的にはほぼ対等に「大雪の（あられなす）」を受けていると考えてよく、「～テキタル」も未だ補助動詞として接辞化しているとは考えられない。もちろんこの1例を「～テキタル」の例と認めない立場もありうるが、かりに「～テキタル」の例として認めれば、上代にはすでに「～キタル」の「～テキタル」という二つの語形が行われていたことになる。これは語形において「～ク」と「～テク」に平行するものである⁶。しかし、上代語の「キタル」と平安時代の漢文訓読語としての「キタル」を単純に同一視することにはいささか飛躍があるように思われる。もし「キタル」の語源は従来「来+到る」又は「来+至る」の約音によるとする（築島裕 1963 : 552 頁、小林芳規 1964 : 47 頁注 43 など）のとおりだとすれば、「来至」、「来到」とも仏典に数多く用いられている語彙であったことも、「来」と「イタル」の複合に際し、与って力があつたものと思われる。日本書紀歌謡九九番歌の意味が「到着する」の意味であること（小林芳規 1964 : 47 頁注 43）も、万葉集では「キタル」の仮名書き例 10 例中、防人の 1 例（四三二六番歌）を除けば、すべて訓読語の使用が指摘されている歌人（旅人、憶良、家持）と旅人周辺の官人又はその関係者（妻の女性）に限られていることも、「キタル」は、特定の位相に属する語彙であることを示しているように思われる。

しかし、それが漢文訓読という、文章や文献を対象に一定の方法に則って組織的な作業によって生み出された漢文訓読語そのものとして見なければならぬことを必ずしも意味するわけではない。むしろ、漢語と出会った過程においてすでに個別的に漢語の語彙に触発されて造成された「翻訳語」（佐藤武義 1976 の用語）であった可能性を示唆しているのではないか。とすれば、万葉語としての「キタル」の位相差もこの「翻訳語」の性格のしからしめたところであろう。本稿は上代語の中に現れている訓読語とされるものについて、漢文の組織的な訓読によって生み出されたものを「訓点語」、漢語を背景に持つそれ以外の、語彙のことを「翻訳語」として区別する立場をとり、「キタル」をこのような「翻訳語」と考える。もちろん、上代語にはこの両者が分かちがたく混在していること、両者の峻別は困難であることはいうまでもないが、両者を区別することによって、いわゆる「訓読語」（築島裕 1963、小林芳規 1964 など）として認定されている語彙について、たとえば正訓字の「山・見る・聞く」が必ずしも漢文訓読の作業を必要としないのと同じように、その多様な出で立ちを切り出すことの可能性を大事にしたいか

⁶ 「動詞+テ+ク」の形に、「～テ+そ・も・とも+ク」のものを含めて、異なり語数 17、延べ語数 36 例を数える。

らである。

以上は、上代語の「キタル」と「来」のおおよその状況である。次に訓点資料における「来」の訓法に移りたい。

3. 訓点語としての「キタル」

平安時代語としての「キタル」が漢文訓読語であることは、つとに築島裕（1963）によって指摘される場所である⁷。対する「来」は訓読では原則として用いられない（551-557 頁）。平安初期の例としては、「古語に流れ来禮留、神語に傳へ来禮留」（續後紀卷第十九、嘉祥二年（八四九）三月の興福寺大法師等の長歌）があり、上代語「キタル」と同一語と認めてよい例とされる（前掲書：556 頁）。本稿は網羅的ではないが、平安時代初期から院政鎌倉時代までの代表的な訓点資料について「～来」の訓法を調べた結果を表にまとめた（附録を参照）。

附録の表を通覧して、『石山寺藏本大唐西域記』（寛元元（1163）年点）と『最明寺本往生要集』（院政時代末期又は鎌倉時代初期加點）を除けば、平安初期から中期にかけての訓点資料では、概ね「～テキタル」と「～キタル」の形の訓が平行し、「～テキタル」が優位であったのに対し、時代が下るにつれて、「～来」が「～キタル」のように複合動詞として訓まれる例が多くなるという傾向が見られることがまず注目される。「～テキタル」は上代語でも異本を含む用例が 1 例あり、特に「持（将）来」を「持ち来る」に訓んだのが『小川本願經四分律古点』（平安時代初期点）と『石山寺藏本法華經義疏』（長保 4（1002）年点）に 1 例ずつあるのに対して、14 例も「持（ち）て来る」に訓まれていることはそれを顕著に示している。そして、「～来」を「～キタル」に訓む傾向は、『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』（C 種点：卷七～卷十、承德 3（1099）年点、E 種点：卷一～卷六、永久 4（1116）年移点）において、遂に異なり語数においても延べ語数においても優勢に立ったのは附録の表の示すとおりである。

この傾向は、一般に、平安初期から平安中期を経て、時代が下るにつれて、漢字ごとに固定した一定の訓に読まれることの方が優先される傾向が強くなるということと軌を

⁷ 築島裕（1969）によれば、「……又、カ行變格活用（「来」一語のみ）も、平安後半期には一般の訓讀には用ゐられず、それと同様の意味は「来る」といふラ行四段活用の動詞によつて表はされてゐる。一方和文では「キタル」は一般に使用されず、専らカ變の「来」を用ゐてゐるから、「来」と「キタル」とは位相的に對立してゐたということが出来る。但し、これには例外もあつて、訓讀の中でも日本書紀の古訓や、漢籍の中、殊に文藝的な色彩の濃いものなどには往々にして「来」を用ゐる事があつた」という（454 頁）。

一にすると考えられる⁸。ここで、改めて漢語の「～来」を「～キタル」ではなく、「～テキタル」に訓むことの意味するところを考えてみたい。

動詞の連用形に接する「テ」は語源的に助動詞「つ」の連体形であり、その結果形式的に、当然意味的にも「～テ」が一端中止を経て更に「キタル」に続くものである。このことは「～テ」と「キタル」がそれぞれ一語としての独立性を意味するとすれば、「～キタル」の場合、そのすべての用例について同じく「来る^{きた}」と断じることとはできなくても、前項動詞と「来る^{きた}」との形式的、意味的な結束がより緊密であることについては恐らく異論はないであろう⁹。とすれば、ここに見たような、平安時代を通じて、訓点語における「～テキタル」と「～キタル」の消長も、ただ単に訓法の変化に符合するだけでなく、漢文訓読語における複合動詞の生成の段階的な進捗を意味しているのではないか。すなわち漢語の「～来」を後項に持つ複合動詞（広い意味では二語が連続する場合だけでなく、間に目的語を挟んで動詞が連続する場合も含む）に対して訓点資料の点者が、目的語を間に挟む場合はもちろん、二語が連続する場合でも複合動詞ではなく、あくまで二語の連結として認識し、それに対応するものとして「～テ」形に訓んだものと思われる。これを裏返せば、訓点資料の点者が訓点語における複合動詞の使用に対して慎重な態度を取っていたことでもある。その中で「～キタル」に訓まれた数々のものは、「前み来る」、「飛（ヒ）来（リ）テ」、「下（リ）来（リ）テ」のように、意味的に分析すれば、いずれも「動作＋結果」の関係を表す、意味的に結合しやすいものであり、その分「キタル」にはなお実質的な意味があったと考えられる。ここに用いられた語形のうち、個々の語彙についてみても、先行、又は同時代の文献に既に複合動詞の語形があったり、語形がなくても「～ク」による複合動詞の形式があったものが優先的に用いられたものが受け入れやすいものであったのではないかと考えられる。例えば、「カヘリキタル」の場合、すでに上代にも「安須可敝里許武：明日帰り来む」（三五〇番）、「還来而：帰り来りて」（一七四〇番）という二つの語形が存在し、「下り来」には、「下り来る^{きた}」の形式はないが、「古之尔久多利来：越に下り来」（四一一三）の語形があり、「持（ち）て」に「キタル」が接する語形は上代には見あたらないものの、万葉集には「三相によれる糸用^{もちて}つけてましもの」（万葉集・五一六番）のように、「モチテ」の用例があった。そし

⁸ 小林芳規 1964：1-35 頁。

⁹ 実際、桜井茂治（1960）のように、平安時代の複合動詞についても単なる二語の連結とする論があり、上代に於いてすでに「～ク」が接辞化したものを認めている以上、正確には、上代語にも平安時代にも「複合動詞」の存在を認める一方で、中には単なる二語の連結も含まれていると見るのが妥当な線であろう。

て同時代の和語複合動詞については、語彙、又は類似の形式「～ク」が重なるのは、「下り来る：下りく」（三宝絵詞、寢覚物語）、「飛び来たる：飛びく」（今鏡）であり、和文脈で語彙、類似の形式とも持たないのは、「ススキタル」、「キホヒキタル」、「ウケキタル」、「モチキタル」¹⁰、「オモムキタル」「メシキタル」、「請シキタル」である。

このように見てくると、『石山寺藏本大唐西域記』（寛元元（1163）年点）と『最明寺本往生要集』（院政時代末期又は鎌倉時代初期加點）において、「持（ち）テ来る」は恐らく従来の訓を踏襲したものであろうし、他に「～テキタル」に訓まれた例のうち、「乗波而来」、「将盲人而来」のように「～テ～」によって訓んだのも、原文の「而」に忠実たらしとする態度の現れと見てよさそうである。そして「後來」を「後レテ来レリ」に、「從來」を「從（り）テ来る」に訓んだのは恐らく点者の複合動詞による訓法に対する慎重な態度の現れではないかと考えられる¹¹。

ここでもう一つ注目したいのは、これらの訓点資料に用いられる「～キタル」を後項に持つ複合動詞は、すべて主体の移動を表す場合に限られることである。対象の移動を表す場合には、『小川本願經四分律古点』（平安時代初期点）に挙げた次の2例のように、

- ・尔時王子。喚耆婆童子来語言。（甲卷二〇ノ五）：
尔（の）時に、王子、耆婆童子を喚ビ来して、語（り）て言（はく）、……
- ・王喚耆婆来語言。（甲卷二三ノ七）：
王、耆婆（を）喚（し）来して、語（りて）言（は）く、……

同じ漢文訓読語の「来す」を用いている。そして、次の例のように、「喚（し）来レ」と訓んだのも目的語を取らない場合である¹²。

- ・王言喚来。無畏王子喚耆婆来。（甲卷二二ノ一三）王言（はく）：
「喚（し）来レ。」とのたまふ。无畏王子、耆婆（の）来（るを）喚して、……

ここにも、「～キタル」の実質的な意味が働いていると考えられる。訓点資料の「モチ

¹⁰ 和文脈には「モチク」の語形はなく、もっぱら「モテク」が用いられるようである。

¹¹ 因みに、『最明寺本往生要集』（院政時代末期又は鎌倉時代初期加點）中の「合せ「」来る」の例は目的語が先行しているものではなく、「～キタル」に意味の中心がある。しかも字音語に訓む訓も示されているように、「～テ～」による訓法、複合動詞、更に漢語サ変動詞の三つの訓法が混在している。これも時代の然らしめるところと見てよさそうである。「持（ち）テ来る」にも「イ・持・来スル」とある。

¹² 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』（C種点：巻七～巻十、承徳3（1099）年点）に、目的語を明示しない「附来」を「附ケ来セ」と訓む例は4例ある。「擎（ケ）来（リ）テ」（C種点）と「請（シ）来（リ）テ」の場合、原文では、いずれも本来の目的語が前置され、訓点では「ヲ格」を明示する必要がない場合である。

テキタル」の例がすべて「～(テ)キタル」のほうに、動作の主体が移動するか、又は主体の移動を含意するという実質的な移動の意味があり、それに先行する動詞はむしろ様態的な意味において後者にかかっているということも、これに関連して理解することが可能である。

このように「～来」を訓読する際に用いた形式は既成の語彙や形式に依存しながらも、「スミキタル」、「オモムキタル」、「モチキタル」、「メシキタル」、「ウケキタル」、そして「請シキタル」のように、漢語の複合動詞に触発されて出来たものもすでに訓点語において用いられたことは、訓点資料に用いられる「～キタル」を後項に持つ複合動詞には、少なくとも在来の和語に既にあったもの、和語に類似の形式があったもの、和語になかったもので新規に生成されたものという三つの層が含まれ、その間に訓読語の度合いが自ずから異なると考えられる。以上の訓点資料で見る限り時系列に「～キタル」による訓法が増加する傾向も、漢語複合動詞「～来」の受容の深化を意味し、なかでも漢語サ変動詞「請シキタル」がもっとも漢文訓読的な複合動詞といえるが、「を」格を取らないという意味ではまだ控えめなものに止まっているといえる。

因みに、中国語の「来」はそもそも主体（人、又は人に準ずるもの）の移動か対象の移動かに頓着せず、その両方の意味を同居させていたものであり、上代語では、主体の移動は「来」で言い表し、対象を移動させる意味の動詞は「来ス」と「越ス」であった¹³。訓読語としてわざわざ「来ス」を造語して両者を訓み分けたのは、ほかならぬ上代からある「来」と「来ス」・「越ス」との対立に対応させるためであったと考えられる¹⁴。「持（将）来」のように主体が移動するとともに対象を移動させる意味の複合動詞の場合、「モチキタル」よりも「モチテキタル」、和語なら「モテク」が好まれたのも、「～テ」によって「キタル」に主体の移動を表す意味を保有するためであり、先に見た、「～テキタル」の実質的な意味を温存するためにほかならない。その意味では、訓点資料の中に現れた複合動詞のなかで、前項、後項とも主体の移動を表すものが、対象を移動させる意味の前項動詞に「～キタル」を添えるものよりも、日本語として自然な語構成である。漢語「～来」の訓読語としての「～キタル」は、形式的には上代語の「～キタル」

¹³ 「来ス」と「越ス」については、木下正俊『万葉集語法の研究』、塙書房、1972年、199-218頁を参照。

¹⁴ 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』（C種点：巻七～巻十、承徳三（一〇九九）年点、E種点：巻一～巻六、永久4（1116）年移点）の「撃（ケ）来（リ）テ」（C種点）と「請（シ）来（リ）テ」（E種点）はいずれも本来の目的語は前置された場合である。春日政治「斯道文庫蔵本願経四分律」、『訓点語の研究』（勉誠社、1984年、156-187頁）には、斯道文庫本に「鉢ヲ過シ来セ」（二十）、「喚ビ来シテ」（二十六）の2例、聖語蔵本に「喚ビ来セ」（三十八）1例が報告されている（177-178頁）。

を受け継ぎながら、その意味・機能を上代語の「来」から受け継いでいるのである。とりわけ「～キタル」の内実はいまだ和語の「～ク」と「来ス・越ス」との対立に対応させて訓まれていたこと、そして「持（ち）来ル」のように一部にはすでにこの枠組みから逸脱するものが現れたことを、後の時代の「～キタル」の用法との比較のために、確認しておきたい。

4. 『今昔物語集』における「来」字の訓方と「キタル」系語彙の使用

『今昔物語集』の「キタル」と「来」を取り扱うことの難しさは、何よりも読み方の決定が困難なことにある。本稿は『今昔物語集』における「来＋活用語尾、助動詞」の語形すべての読み方を決定するためのものではないが、必要最小限の基準を立てて、論を進めたい。その際、参考になるのは、小池清治（1981）である。小池氏は、「来」の訓法について、以下の基準を設けている。

- 一、地の文においては、キタル系訓を採用する。
- 二、会話文においては、男性から男性への発話にはキタル系訓、男性から女性へ、女性から女性への発話にはク系訓を採用する。
- 三、心中思惟（心話）、しょうそくぶんあ会話文における採用基準に準ずる。

天竺部震旦部の諸巻における「来」字については言及できなかったが、基本的には、この訓法でよいものと推測している。（249-250 頁）

この三点の訓法ははたして妥当かどうかについて、やはり検証を要する。問題は、「キタル」の連用形「キタリ」と「来」の連用形に助動詞の「タリ」が接する形と同形であり、意味的にも連絡があるところにある。そこで、まず「来」の確実な例をからみてみたい。

4.1 『今昔物語集』における「来」字の訓法

『今昔物語集』における「来」字の訓法を決める前に、その問題点を整理すると、次の二点になる。

- 一、平安時代の漢文訓読語である「キタル」と和文脈に用いられる「来」は、「～キタル」、「～ク」も含めて、今昔物語集のなかでどういう分布を示しているのか。
- 二、「～キタル」がどのように和漢混淆文に混入されているのか。

まず、第一点から見てみると、今昔物語集の表記法は、一般的に「漢字片仮名交り文」とも「片仮名宣命書」とも言われ、「片仮名で表記された部分は、文法的に見れば、助動詞・助詞・接尾辞・用言の活用語尾・体言の捨て仮名などが殆どを占める」（山口佳紀 1993：425 頁）とされる。

読み方の決定に最も有力な根拠は底本にある全訓捨て仮名であるが、「来」に全訓捨て仮名を付した例は、

- ・極テ怖シ気ナル音ヲ挙テ、「己ハ何コマデ罷ラムト為ルヲ。我レ此ニ有トハ不知ザリソルカ」ト云テ、追テ来クル。「卷二十七第十四話」（底本：鈴鹿本）

の 1 例だけである¹⁵。

しかし、この例については新日本古典文学大系『今昔物語集』五の校注者森正人氏は、『くる』は全訓捨て仮名。「タル」の誤りか。」と注しているように、「タル」の誤写の可能性も否定しきれないので、そのまま信用することに躊躇を感じるが、一応「全訓捨て仮名」としておく。それにしてもただ一例だけなので、如何ともしがたい。訓を決定するための手がかりはやはり別に求めなければならない。そこで注目したいのは命令形である。「キタル」の命令形なら「来レ」と表記するのが普通で、対する「来^く」の命令形は「コ」だけなら、「来」によって、「コヨ」なら「来ヨ」と表記するからである。

- ・【話】「馬ヲ取テ来ヨ」ト許云懸テ、取テ来ラムモ不待、「卷二十五」（④529-2）
- ・【話】女「上テ来」ト云ケレバ、「卷二十九」（⑤292-13）

そこで、「キタル」と「来^く」の命令形を巻別に調べると、次のような結果が得られた。

表 1：「キタル」と「来^く」の命令形の分布

巻	1	2	3	4-11	12	13	14	15	16	17	19	20-22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計
語形																						
キタル	3	2	3		2		1	1	3		2		3	1		1		1	1		2	26
ク													1	2	2	1		3	1	2	1	13

表 1 の示すように、「キタル」の命令形がほぼすべての巻に用いられているのに対し、「来^く」の命令形は二十三巻以降に限られる。そこで、もう少し「キタル」の確実な表記

¹⁵ 他の 1 例は、「行テ^{もて}負持来クル者ハ」、「卷二十七」（⑤179-8）（底本：鈴鹿本）である。

とほぼ確実なものも含めてその分布を調べた結果が表 2 である。

表 2：表記別に見る「キタル・ク」用例の分布

表記 巻	来リ	来リ給	来給	来レリ	来レル	来タリ	来ラム	来レ(命令)	来(命令)	来ム
一		7(2)	13(5)	10(8)	(2)		(3)	(4)		
二		6(3)	2(1)	(3)	(5)	1	1	(3)		
三	(1)	1	3(2)	6(4)	(1)	1	(2)	(3)		
四	1	2(1)		4(2)	6(5)		(2)			
五		1		4(2)	3(2)	2	(2)			
六	2(1)	5(4)		10(7)	10(9)		(1)			
七				5(1)	11(8)	2	(2)			
九	(1)			(2)	8(5)	1	(2)			
十		4(1)	1	9(2)	7(5)		(1)			
十一	3(1)	(1)	2	8(4)	16(9)		(1)	(1)		
十二	(1)	(5)	1	5(2)	10(6)	1	(1)	(3)		
十三		(5)	(1)	5(2)	(10)					
十四		1	(1)	2(1)	5(3)		(1)	(1)		
十五		8(5)	(1)	6(3)	5(4)			(2)		
十六		(1)		5	4(3)	2	3(2)	(4)		
十七	2(1)	8(5)	(2)	2(1)	6(2)					
十九		(2)	(2)	2(1)	3(1)	2		(2)		
二十	2			4(1)	2	4	(2)		(1)	
二十二			(1)							
二十三					(1)			(3)	(1)	(1)
二十四	3(1)				4(2)	1	(5)	(2)	(2)	(2)
二十五						3(1)	2(1)		(5)	
二十六					1		(4+2)	(1)	(2)	
二十七	1				3(2)	(1)	(2)	(1)		
二十八	(1)				1	1		(1)	(7)	
二十九							(1)	(1)	(3)	(1)
三十	(1)								(2)	(2)
三十一					6(2)		2(1)	(2)	(3)	(1)
合計										

注：()内は会話文、又はそれに準ずる心話の用例。「来レ」(命令形)には「～テ来レ」、「～来レ」の用例を含めた。「来」の命令形には「～テク」、「～ク」の用例を含めた。「来ラム」には「来ラン」の表記を含めたほか、「来ン」の表記でも、同一説話内に「来ラン」の確実な用例があり、ほぼ「来ラン」と判断できる 2 例を加算した。

表 2 に挙げた表記のなかで、「来タリ」には、「キタル」の連体形の表記である可能性と「来」の連用形に「タリ」が接した形の可能性もあり、「来ラム」の表記には、「来＋タラ(タリの未然形)」の可能性もあるので、除いてみると、次の二点がまず注目される。

- 一、「キタル」と「来^く」の訓が確実な例の分布は、ほぼ巻一から巻十九と巻二十から三十一に分かれていること。
- 二、「来^く」が巻二十以降に現れるのに対し、「キタル」の「来リ」、「来リ〜」、「来レル」は二十巻以降にも現れていること。

この分布の境界線は凡そ二十巻と二十二巻の間にあることは、従来の諸説に一致する¹⁶。これによって「キタル」と「来^く」はそれぞれ漢文訓読体と和文体に一応対応する対立を認めることができるが、しかし、これは「来^く」が依然和文脈に対応する語彙として用いられるのに対して、「キタル」は漢文訓読文脈を中心に、和文脈の強い巻にも用いられているという非対称的な対立は何を意味するのか、考えてみなければならない。ここでは引き続き「〜キタル」と「〜ク」の確実な用例のうち、特に巻二十二以降に現れる「来^くレル」の用例を分析したい。

- ①【話】童ヲバ、「暁ニ迎ヘニ来^くレ」ト云テ、返シ遣リツ。「卷二十三第十六話」(④354-7,8)
主人→童
- ②【話】僧正、「行テ火灯シテ来^くレ。……」・○【話】「…法師原呼ビ具ヒテ来^くレ」「卷二十三第二十話」(④364-6,8) 僧正→法師
- ③【話】「耶、己レ此ク有ケルハ、只来^くレ」ト云ケレバ、「卷二十四第五話」(④390-2)
絵師→飛弾の工
- ④【話】「此ヘ来^くレ。見ム」ト云ケレバ、「卷二十六第十六話」(⑤67-4)
舍人(馬の口取り)→船ニ乗テ商スル者
- ⑤【話】「此ノ唐櫃、只今祇園ニ持参テ、誦經ニシテ来^くレ」ト云テ、「卷二十八第十一話」(⑤216-4) 守→人夫
- ⑥【話】「彼ノ女ノ入ラム所、慥ニ見テ来^くレ」「卷二十九第二十八話」(⑤357-12)
中将→小舍人童
- ⑦【話】「此ハ何ニ」トテ、「此ニ人来^くレ」ト云ヘドも、「卷三十一第七話」(⑤454-7)
右少弁師家→家人
- ⑧…来^くル人ヲ見レバ、【話】主、「例ノ物共取テ来^くレ」ト云ヘバ、「卷三十一第十四話」(⑤471-7,8) 家主ノ僧→法師

この中で、②、⑧のように僧侶の会話、⑤、⑥、⑦のように官僚の言葉に用いられているものもあるが、①、③、④はむしろ普通の職業の人間の普通の会話に用いられているのは、僧侶、官僚、学者の言葉という訓点語の位相から逸脱したものであろう。本来ならば、他にも「来^く(ヨ)」の例があるように、もし「キタル」と「来^く」の間に歴然とした

¹⁶ その代表的なものとして、加納協三郎(1938)、堀田要治(1941)、山田巖(1941)、石垣謙二(1941)などが挙げられる。とりわけ「キタレリ」が巻二十までに限られることは、ただ単に「キタル」の使用ではなく、平安時代以降における「リ」の退潮とも関連すると思われるが、巻二十とそれ以降の諸巻との断絶を示す現象として、二十一巻以降が追補される部分であるという、石垣謙二(1941)の指摘が注目される。

位相差があったならば、このような非日常的な語彙である「キタル」を命令形に用いないのではないかと考えるのが普通であろう。しかし、これをそのまま「キタル」が実際すでに普通の人の会話にまで用いられるようになったと判断するのは早計であろう。ここには訓点語からは逸脱するものの、やはり当該説話の文体の基調に相応しいように実際使わない言い方を意図的に選んだものと思われる。その限りでは「キタル」はすでにある特定の文体のために要求されるような表現といえる。その文体とは何か、それが即漢文訓読体であるというよりは、漢文訓読体取り分け巻一から巻二十まで用いられていたような表現を背景に持つことは否定できないが、漢文訓読体そのものではない、かといって和文体でもない、第三の文体、すなわち和漢混淆文体と見るのが妥当であろう¹⁷。それを「キタル」の用法からみれば、和文体への浸透、接近でもある。

しかし、以上のように、巻二十までと巻二十二以降とで、それぞれ「キタル」と「来」の確実な用例が分布しているという、従来の諸説を裏付けているような事実が確認できても、すべての巻にわたって、「来ル」と「来」を訓み分ける作業にすぐつながるとうてい考えられない。むしろ、「来」が依然和文体に用いられる一方で、「キタル」はすでに漢文訓読体から和漢混淆文体へと大きく浸透してきたという、非対称的な対立として考える所以であり、「キタル」の和文脈への浸透を示す端的な例といえる。次節でみる「^{いでく}出来」、「^{いできた}出来る」についても同じである。

4.2 『今昔物語集』における「^{いでく}出来」、「^{いできた}出来る」の分布

今昔物語集における「～キタル」と「～ク」を考える時、もう一つ注目したいのは、用例から見て「イデク」の確実な用例が巻一、三、四に以下の数例見られることである。

- ①【出キヌ】[地][汗] ○汗^{いで}出キヌ。「巻一」(①4・6)
- ②【出キテ】[地][手足] ○手足^{いで}出キテ故ノ身ト成テ、「巻一」(①96・13)
- ③【出キテ】[地][心] ○心忽ニ^{いで}出キテ思フ様、「巻三」(①224・9)
- ④【出キニケレバ】[地][衣ノ種] ○衣ノ種^{いで}出キニケレバ、「巻四」(①328・14)
- ⑤【出キ御座タリ】「巻第四」○【話】「仏ハ^{いで}出キ^{おはまし}御座タリカ」ト云フ。「巻四」(①332・11)

「イデク」そのものは漢文訓読語ではなく、上代にすでに次のような例があり、平安物語のなかにも多く用いられる和語である。

¹⁷ その意味では、このような「キタル系」語彙の用法も、山口佳紀氏のいう「漢文訓読体でもなく和文体でも勿論ない、第三の文体、所謂和漢混淆文」の一部ということになるのではないか。(山口佳紀 1993: 369 頁)。

⑥汝が母にこられ我は行く青雲の出来来[伊弓来]我妹子相見て行かむ (三五一九)

それが何故漢文訓読調の強い前半に現れるのか、ということは一見先に見た表 1、2 に示された、「キタル」と「来」の分布と相反するようであるが、実はかならずしもそうではない。この数例で見る限り、いずれも和語に用例を事欠かさないものばかりである。①は体内から自然に出てくるという意味で、「イデク」の原義に近く、②,③,④はそれぞれ物やそれに準ずるものが発生するという意味で、⑤は仏が現れるという出現の意味である。しかし、ここはなぜ当該説話の文体の基調である漢文訓読調に則って「イデキタル」を用いなかったのか、説明を要する。ここで考えられるのは、「イデク」と「イデキタル」の意味用法が完全に重なったわけではなく、互いに重なりながらそれぞれ異なる用法を中心として持っていたということである。ここで「出来レリ」と表記される 22 例の主語を見てみると、物を表す名詞を主語に持つ次の 1 例、

⑦[地][金ノ華器]○亦、灰ノ中ニ金ノ華器^{いできた}出来レリ。「卷十一」(③36-7)

を除けば、すべて人、物の怪、鬼を主語に持つ物であり、人でも次の聖人の 1 例、

⑧[地][聖人]○一人ノ聖人^{いできた}出来レリ。「卷十五」(③405-2)

を除けば、人や物の怪、鬼が「出現する、現れる」という意味に用いられ、しかもすべて身分の低い人に限られるのである。そして、先に見た例⑤の「心」のような抽象的な語彙を主語に持つ例はなく、自然現象を表す主語を持つものもみあたらない。ここに両者の違いがあるのではないかと考えられる。そのように考えてみると、例⑧の「^{しょうにん}聖人」も果たして身分の高い人という意味かどうか定かではない。他にもあるように「止事無キ人」という程度のものではないかと考えてよさそうである。今昔物語集の中にある数多くの「出来テ」と表記されるものを、雨や風のような自然現象、心のような抽象的なもの、身分の高いもの場合は「イデク」、それ以外は「イデキタル」というふうにتمي分けることが可能ではないかと思われる¹⁸。そして、漢文訓読語の「イデキタル」に

¹⁸ あるいは人物が現れる意味の場合すべて「イデキタル」に読む方が妥当かもしれない。その場合、前掲例 5 の解釈をどうするか、問題が残る。ただ、例 5 の場合、「オハシマス」という敬語と接するために漢文訓読語の「イデキタル」が忌避されたという解釈も不可能ではない。一方、「来リ給(フ)」の例が多数あるので、敬語の中でも「タマフ」と「オハシマス」の間の違いも一因として考えなければならない。どちらの解釈がより妥当なのか、俄に断じがたく、しばらく解釈を保留したい。

当たる漢語の「出来」の意味は正にこの人や物が出現する意味に限られることもそれを裏付けている。このようにして、今昔物語集全体を通じて多く用いられている「イデク」は、漢文訓読語「イデキタル」の用法と棲み分けながら、独自の用法を和漢混淆文に持ち込んだものと思われる。和文なら恐らくすべて「イデク」で統一されたであろうし、漢文訓読体そのものなら恐らく「イデク」の入り込む隙さえなく、「イデキタル」で十分であり、自然現象を表すもの、抽象的な主語を持つものはそれぞれの動詞を訓読風に言い表せば良いはずである。漢文訓読調の強い巻にこのような「イデク」の闖入を許したのはやはり和文でもない、漢文訓読体そのものでもない、和漢混淆文体なのではないか。そして、和文脈において「イデク」がすでに上代語の例のように「中から外へ出てくる」意味から「事態の発生、物の生成」の意味へと大きく伸張したこともあずかって力があつたものと思われる。果たしてそうとすれば、「出来テ」、「出来タリ」と表記されるものの訓を決定するための手がかりになるだけでなく、これは、巻二十までと巻二十二以降との文体的な差はやはり厳然たるものであることの傍証にもなる。

4.3 『今昔物語集』における「キタル」の使用

以上は訓の決定に関連して、確実な用例の分布と用法を一部見てきたが、以上のことを踏まえて、上代語、訓点語との関連で今昔物語集のなかで特に確認しなければならないことは、次の三点である。

- 一、「キタル」と「来^ク」の位相差はどの程度維持されているかどうか。
- 二、「～キタル」に「ヲ格」を明示するようになったかどうか。
- 三、「～キタル」が接辞化したかどうか。

一については、すでに訓の決定に関連して、表 1、2 に示したとおり、両者の位相差は非対称的ながらおおむね維持されていたと考えられる。二について、以下の例が参考になる。

⑨【話】「…木ヲ他国ヨリ^{ひききたり}曳来テ、…」「卷十一」(③84・13)

⑩【話】「我レ聞ク、「昔天竺ヨリ仏法ヲ震旦ニ^{つたへきたり}伝来ケル事ハ、白キ馬ニ負セテゾ来リケル」。……」「卷十一」(③91・7)

例⑨については、「ヒキク」の用例は 1 例だけであるが、『曾禰好忠集』にあり、ここは、和語の「ヒキク」と訓む可能性もないわけではないが、ここでは「ヒキキタル」と訓んでおく。例⑩は平安時代の和語に「ツタヘク」の用例がなく、「ツタヘキタル」と見

て間違いなさそうである。用例がこれだけ少ないということは、「～キタル」は未だ積極的に「ヲ格」を取るまでには至っていないことの現れと考えられる。しかし、訓点資料に一旦現れた「～来ス」の用例は管見のかぎり一例もなく、単独の用例も1例しかない¹⁹。対象の移動を表す場合は他ならぬ「モテキタル」と「キテキタル」を用いたようである。しかも、次の例⑪、⑫助詞「ヲ」を直近に持つことは先の2例のように、「ヲ格」を明示しながらも場所名詞を動詞との間に挟むのと異なるようである。

⑪亦、瓢ノ為ニ縫物ノ衾ヲ卷^{もてきた}キ持来^{もてきた}レリ。「卷十」(②337・4)

⑫多ノ罪人ヲ将来^{もてきた}レリ。「卷四」(①336・12)

この二例についても「～キタル」にはまだある話し手のいる場所への移動という実質的な意味が若干残っていると考えられる。因みに、「責メキタル」の場合でも「ヲ格」ではなく、「ニ格」と共起する例がある。

⑬【話】「…此城ニ責^{きた}メ来^{きた}ル。…」「卷六」(②30・8)

以上のことを総合すると、「～キタル」の接辞化はまだ起こっていないことと考えてよさそうである²⁰。

次に「キタル」、「～キタル」が漢文訓読調の強い巻一から巻二十までだけでなく、従来和文調が強いとされる巻二十二から巻三十一にも用いられていることの意味を考えてみたい。問題は、「キタル」と「～キタル」が実際の漢文訓読体との距離はどれほどあったのか、に集約されるが、巻十までの『三宝感應要略録』と『冥報記』に出典を持つ説話を用いて、原典とその訳語の分析を通して、いくつかの手がかりを手に入れた。この二つのテキストは共に古写本が存在し、しかも実例のように、いずれも原典にほぼ忠実に訳されているからである。

5. 『今昔物語集』の翻訳話に見る翻訳態度、文体意識

—『三宝感應要略録』と『冥報記』の訳語を例として—

¹⁹ 【話】「…皆来^{きたし}テ我が所ニ持シ奉ラム。…」ト。「巻一」(①90・7)

²⁰ 「キテク」と思われる例の場合は既に接辞化したものと思われる例がある。「侍ニハ、落ブレタル尊ノ子共ノ為方無く不合ナルヲ、語^{かた}ヒ将来^{きた}テ、様々ニ装ゾカシテ仕ハセケリ。」「巻三十一」(⑤447・1)。

5.1 訳語に見る訳者の翻訳態度と文体意識―「来」の場合―

本項では、『三宝感応要略録』(以下『要略録』と略す)と『冥報記』を出典とする説話のなかで、「来」がどのように訳されているのかを中心に、これらの翻訳話において「キタル」系語彙の用法がいかなる分布を示しているのかを分析したい。訳語の分析に際して、以下のようにA～Fの六類に分けて整理した。

- A. 出典の「来」(「～来」、「来～」を含む)を「キタル(～キタル、～テキタル、キタリ～、キタリテ～)」とした場合
- B. 出典には「来」がないのに、「キタル(～キタル、～テキタル)」とした場合
 - I. 出典にある「来」の類義語を「キタル(～キタル、～テキタル)」とした場合
 - II. 出典にある「キタル」を含意する語を「キタル(～キタル、テキタル)」とした場合
- C. 出典にはなく、撰者自身が文意によって加えた場合
- D. 出典の「来」を他の語に置き換えている場合
- E. 字音語とした場合
- F. 出典の「来」を全く無視した場合²¹

以上の分類にしたがって、『要略録』出典の説話の「来」と「キタル」系語彙との関係を表にまとめた。

表1: 卷二、卷四、卷六、七中『要略録』出典の説話における「来」と「キタル」²²

両者の関係	キタル	～キタル	～テキタル	キタリ～	キタリテ～	小計	%
A	11	4	6	4	18	43	55.84%
B I	2	1	1		1	5	6.49%
B II	1	3			7	11	14.29%
C	3	5	3		7	18	23.38%
小計						計 77	100%
D	4						
E	1						
F	3						

ここで便宜上、『要略録』を出典に持つ説話における「来」の訳し方を、(1) 説話として必然的に要求される場合の使用、(2) 説話そのものとして必然性がなくても、訳者が何かの必要を感じて追加する場合の使用、(3) 中国語と日本語の違いを反映する場合の使用、という三つの層に分けて考えたい。(1) は説話の構造に関係するのに対し、(2)

²¹ 但し、「来」を含む一文丸ごと省いた場合(卷六第十一話、出典:『要略録』上巻第九話など)は除いた。

²² 卷六における『要略録』を出典とする全39話のうち、「キタル」を含まないのは12話、卷七における『要略録』を出典とする全12話のうち、「キタル」を含まないのは2話あるので、実際は37話が対象となる。

は文体的な意味合いが大きく、(3) は文法的な意味合いが濃厚であると考えられる。

そこで、まずDの用例を見てみると、以下の4例である。

- 1 「来」 → 「詣ヅ」
 - ・ 躬來禮謁。望觀聖容。(要略録・中・36) :
清涼山ニ詣ヅ、礼拜恭敬シテ、「文殊ノ實ノ形ヲ見奉ラム」ト願フ。(巻第六十話)
- 2 「来迎」 → 「行テ〜ヲ迎フ」
 - ・ 明星出時我來迎。:
明星ノ出デム時ニ至テ、我レ、行テ汝ヲ可迎シ。(巻第六十七話)
- 3 「来集」 → 「集来ル」
 - ・ 親屬奴婢。來集家室涕泣。(『要略録』・上・28) :
而ルニ、親キ族・従者等、皆、家ニ集リ来テ泣キ悲テ、歎キ合ヘル事无限シ。(巻第六十一話)
- 4 「来」 → 「至ル」
 - ・ 王見我來云。(『要略録』・中・53) :
王、我ガ至レルヲ見給テ宣ハク、(巻七第八話)

このうち、1の場合、古語の「詣ヅ」は、「神佛に参詣する」、「聖地に参上する」の意であり、「来」よりも「ユク」の意に用いられる漢語の「去」に相当する。2の「行テ」と併せて、共に目的地、又は目的地にいる対象に視点を置く表現として同じである。この2例の訳は、逆に「キタル」という語り手、又は登場人物に視点を置いた表現に改変されていることは、古代中国語の「来」が目的地、又は目的地にいる対象にも、移動する主体側にも視点を置く表現であるのに対し、和語「来^キ」及び訓点語「キタル」は移動する主体側の視点しか持たないという、両者の違いを明瞭に意識したためと考えられる。この違いは現代語の「来ル」と中国語の「来」の間にもそのまま受け継がれており、日本語なら、相手のところには「行く」を使うのが普通で、「来る」が使えないのに対し、中国語の場合は「来・去」の両方が使えるのである。これに関連して、4は「キタル」ではなく、目的地点への到着を表し、特に視点を反映しない「至ル」と訳したのも、「キタル」では、語り手の視点と相手（「王」）の混線を恐れての処置ではないかと考えられる。この3例の訳語の改変は共通して、語り手の視点によって説話を展開させていくという語り口であり、説話の展開において語り手の視点と説話中人物の視点をはっきりさせようとする努力の現れであり、訳者が語り手の視点と登場人物の視点の違いに鋭敏な感覚を持っているとみるべきであろう。そこで、残る3であるが、これは他の3例と若干性格が異なる。「来集」という複合動詞は中国語では極ありふれた、「移動動詞+目的・結果を表す動詞」の語構成であるが、日本語の場合、「来リ」を前項に持つ

複合動詞は「～キタル」を後項に持つ場合ほど生産的ではない。実際、東辻保和他編『平安時代複合動詞索引』（清文堂、2003年）で調べてみると、「キタリ～」が34、「～キタル」が75、「キ～」が25、「～ク」が211の異なり語数が収録されていることもそれを物語っている。先に見た表1のなかで、「キタリ～」の語形そのものだけでなく、BI以下の例は一例もなく、BI以下の用例は、「キタリ～」を除く語形にまんべんなく分布しているのとは一致する結果である。とすれば、「来リ集マル」は漢文訓読語としてはもちろん、取り分け逐字直訳に近いものということになる。それでは、対する「集来ル」はどうか、実際、漢訳仏典のなかでは、次の例のように「集来」が全く用いられないわけではない。

- ・爾時復有無量比丘。遊行諸國遇斯光已。皆悉集来至於佛所。（佛說諸法勇王經 宋罽賓三藏曇摩密多譯）

しかし、漢訳仏典のなかでは、「来集」の例が圧倒的に多く、複合動詞として認定できる「集来」の例がほんのわずかである。これも中国語と日本語の文構造、語構成の違いに関わることとして注目しておきたい。概して言えば、日本語としての「集来ル」は「来集マル」に比べてより自然な語構成であり、同じく漢文訓読語を背景に持つ語彙ではあるが、「来集マル」ほど漢文訓読語的ではないという文体的な特性を持つものと見ることが可能である。これは次のBIIの例においても訳語として「出来ル」のような複合動詞が選ばれたのと相通じるところである。次にBIIの用例を見てみる。下記11例である²³。

- ①時有鸚鵡鳥。（要略録・上・17）：
其ノ時ニ國ノ中ニ鸚鵡鳥出来タリ。（卷四第三十六話）
- ②諸帳幕間。有金色毛鼠。齧斷弓弩弦及器仗。悉不堪用。（『要略録』・中・38【誤→58】）：
亦、諸ノ帳・幕ノ内ニ、金色ナル鼠俄ニ出来テ、弓ノ弦ヲ食切り反シ、器仗モ悉ク用ニ不稱ズ。（『今昔物語集』卷六第九話）
- ③（惠鏡）生年六十有七。正月十五日夜。夢有一人沙門。身黃金色。（『要略録』・上・7）：
而ルニ、惠鏡、年六十有七ト云フ年ノ正月十五日ノ夜ノ夢ニ、「一人ノ僧来レリ、身ノ色金色ニシテ光ヲ放ツ。（卷六第十五話）
- ④又復夢見前沙門。告鏡曰。（『要略録』・上・7）：
亦、夢ニ前ノ僧来テ、惠鏡ニ告テ宣ハク、（卷六第十五話）
- ⑤沙門童真。問疾在側。（『要略録』・中・3）：
靈幹ガ病ヲ訪ハムガ為ニ、来テ傍ニ有リ。（卷六第三十二話）
- ⑥向見青衣童子引至兜率天宮。（『要略録』・中・3）：
忽ニ青衣ノ童子、此ノ所ニ来テ、我レヲ兜率天宮ヘ引ク。（卷六第三十二話）
- ⑦見有一僧云。是地藏菩薩。（『要略録』・中・6）：

²³ 前節の分析に従って、例1「出来タリ」と例2「出来テ」は「現れる」意味であり、「イデキタル」と訓んでおく。例3~10は「キタル」、例11は、「出来テ」と訓む。

其ノ時ニ、一人ノ沙門来テ、我レニ告テ云ク、『我レハ此レ、地藏菩薩也。……』(巻六第三十三話)

⑧見三人冥官驅没官。到於大城前。(『要略録』・中・4) :

三人ノ冥官来テ我レヲ駈テ、一ノ大キナル城ノ前ニ將至ル。(巻六第三十五話)

⑨夢有天女。摩書生身。(『要略録』・中・20) :

其ノ夜ノ夢ニ「一人ノ天女来テ、書生ガ身ヲ撫ツ」ト。(巻六第三十八話)

⑩府君夢示云。吾昔在佛前。親聞此經。(『要略録』・中・60) :

大山府君来テ示シテ宣ハク、『我レ、昔シ、佛前ニ有テ、面リ此ノ經ヲ聞シニ、……』(巻七第十二話)

⑪有沙門謂道曰。王若推問。應作是言。(『要略録』・中・64) :

其ノ時ニ、一人ノ僧出来テ、我レニ語テ云ク(巻七第二十二話)

BII の例のうち、「有」を「キタル (イデキタル)」と訳した例が 1, 2, 3, 9, 11 の 5 例、「見」を「キタル (出来ル)」と訳した例が 4, 6, 8 の 3 例、例 7 は「見有」は両者を兼ねる例で、どちらに入れてもよいが、三者合わせれば、全 11 例中 9 例を占める。残る例 5 と 10 は、それぞれ「問疾在側」と、「夢示云」を意識したような場合である。ここで考えられるのは、なぜ「有」を「来」と訳さなければならなかったのか、ということである。同じく漢文訓読的に訳せば、「有」だけではなく、「見」、「問疾在側」、「夢示云」などすべて訓読出来たはずである²⁴。「有」は物の存在を表し、「見」は直接的には物を見るという行為であるが、物の存在を含意する動詞である。両者いずれも物の存在を表したり含意したりする「静的な」表現であるのに対して、「キタル (或いはイデキタル)」も物の存在を含意しないわけではないが、物の存在よりも物が移動することを表すものであり、しかも語り手の視点を反映したものである。もちろん、実際、登場人物に視点を同化させることもあるが、「キタル」の使用は、とりわけ語り手中心に説話の筋を展開させる語り口を印象づけるためのものではないかと考えられる。もちろん、原漢文のように、存在動詞「有」、物の存在を含意する「見」などを用いるという語り口も一方にはあり得るし、実際原漢文では「来」の使用はさほど活発ではない。ここに訳者の意図的な創意が認められるのではないか。それは少なくとも、一つは漢文訓読体に対するささやかな抵抗として、そして今ひとつは漢文説話の語り口、それは往々にして平板な印象、語り手の視点もしくは登場人物の視点よりも、一層「超越した」視点の語り口に対する反発、これを裏返せば独自の語り口の確立への意欲的な実験と見ることができるのではないか。しかしこの問題はもはや文体論の埒外に属し、本稿の内容を超えるものなので、ここでは、示唆するだけに止めたい。

²⁴ 実際、人又は人に準ずるものを主語に持ち、後に動作性の動詞が続く構文の「有」を「有テ」と漢文訓読風に用いる用例は『今昔物語集』に多く見られる。「有」の訳し方にも「来」と共通する部分があるが、詳しくは次節に譲る。

一方、以上の用例について、文体の問題として看過できないのは、語り口や説話の構造に関わる場合と同じく、何故他ならぬ「キタル系」の語彙が多数訳文に現れているか、つまり何故それが選ばれたのか、ということであるが、これはむしろ出典の文体とは別に、訳者の文体とも言うべきものの存在を窺わせる現象として、人物、動物の出現にはおおむね「イデキタル」が用いられること（BII 例 1, 2, 11）、「キタル」を用いる場合にもすでに定型化の傾向が見られること（BII 例 3, 4, 9, 10 のように夢に人が登場する場合）が指摘できる。次に BI の例を見てみたい。下記のように 5 例である²⁵。

- ⑫每講花嚴。遠近涼燠。……（『要略録』・中・3）：
常ニ華嚴經ヲ講ズ。遠近ノ人、皆、来テ此レヲ聞ク。（卷六第三十二話）
- ⑬所歴三十餘國。天后證聖元年。還至〔7〕阿洛。（『要略録』・中・30）：
天竺ニ渡テ卅餘國ニ遊行シテ、本ノ震旦ニ還リ来テ法ヲ弘ム。（卷六語第四十二話）
- ⑭汝誦經力。得到極樂邊地。（『要略録』・中・26）：
汝ヂ、勲ニノ經ヲ持スルカニ依テ、此ノ界ニ可来シ。（卷六語第四十四話）
- ⑮即遣使藏中。取功德簿。將至王所。（『要略録』・中・57）：
即チ、使ヲ藏ノ中ニ遣シテ、功德ノ箱ヲ取テ、王ノ前ニ持来ル。（卷七第九話）
- ⑯思師恩故。聽師講故。降臨此處。（『要略録』・中・66）：
「…師ノ恩ヲ報ゼムト思フガ故ニ、此ノ所ニ来レル也。願クハ亦、法花經ヲ講ジ給ハムヲ聞カムト思フ」ト。（卷七語第二十四話）

このうち、⑫については、原漢文「遠近涼燠」のままでは文意不通のため、脱文があるかと思われる。実際、「出經傳文」の注記に従って、『法華經傳記』卷二にある原典の該当箇所には、「幹每講此經。亟延涼燠。四方進結。塵接相望。」とあり、「遠近」と「亟延」の小異（誤写の可能性はあるが）はあるものの、おそらく「四方進結。塵接相望。」そのままか、これに近い本文が脱落していたと思われる²⁶。従って、ここは「四方進結。塵接相望。」を「キタル」に訳したか、文意から推して補ったものと思われるが、処理としては前者に従って、BI の例とした。例⑬、⑮、⑯は複合動詞後項に用いられる「～至」をそれぞれ「還リ来ル」、「持テ来ル」に訳しているが、「来」と「至」は話し手のいる場所への移動、ある場所への到着をそれぞれ表し、到着するという意味において両者が類語的な関係にある。実際訓点語では、「至」に「キタル」と施訓した例も、築島裕編『訓点語彙集成』第三巻に、「至キタテ」（大毘盧遮那經疏卷第四～十、保安元年点）、「至キタル」（戒律傳來記卷上、保安五年点）

²⁵ これらの用例中、例 3, 5 は「キタル」の確実な例であり、1, 2, 4 も「キタル系」語彙と訓んで差し支えない。

²⁶ この説話に関する限り、『要略録』は原典の不用の部分の或いは一文、或いは数文丸ごとと省いて抄録したものであり、脱文は抄録の過程か、写本の生産過程に生じたのであろう。本文としては『要略録』より原典のほうがよく整っているが、文意からして、原典より『要略録』のほうが適切と思われる例は、「亟延」と「遠近」の 1 例だけである。

が収録されているところを見れば、ほとんど改変ともいえないような対訳である。因みに、「将至」をそのまま漢文訓読語的に「将至ル」と用いる例は、先に引いた、BII の例 8 がある。そこでは、例のように「至于」を「将至ル」に訳している。

- ⑬至于閻魔法王所。(要略録・上・9) :
即ち、閻魔王ノ所ニ将至タルニ、(巻六語第十一話)

そして、同じ『要略録』に出典を持つ、巻六第九話の次の例がある。

- ⑭見三人冥官驅沒官。到於大城前。(『要略録』・中・4) :
三人ノ冥官来テ我レヲ駈テ、一ノ大キナル城ノ前ニ将至ル。(巻七第九話)

二例とも、「A 地点から移動し B 地点に到着する」という意味であり、しかも話し手自身が移動し、他所の場所に到着するという場合、「キタル」の持つ「話者の居る場所への移動」という視点と矛盾する場合に限られていることは、一層、B 類用例について指摘したような、「至」を「来ル」に訳した場合の視点の違いを裏付けるものとして興味深い。先に D の用例について指摘した、訳者の説話の視点、登場人物の視点に対する敏感な言語感覚はここからもしっかり読み取れる。そして、これは以下 C に属する「～キタル」4 例についてもいえることである²⁷。

- ⑮如夢從像出妙色身。似少像。(『要略録』・上・23) :
夢ノ如クニ妙ニ嚴シキ人出来タリ、小サキ比丘ニ似タリ、(巻四第三十八話)
⑯其年二月十一日。奏請兵。(『要略録』・中・38【誤→58】) :
其ノ年ノ二月十一日ニ、彼ノ城ヨリ□ 云、「大石康ノ五國軍、此城ニ責メ来ル。然バ、軍ヲ給ハリテ彼ヲ可禦シ」ト。(『今昔物語集』巻六第 九話)
⑰於中二人。近於庭上呼元壽。(『要略録』・上・14) : 其ノ中ニ二人ノ人有テ、庭ノ上ニ近付キ来テ、元壽ヲ呼ブ。(巻六語第十八話)
⑱日午時有一鹿。突門而入。(巻六語第四十五話震旦梓洲郡縣姚待、寫四部大乘語) :
而ルニ、日ノ午時ニ至ルニ、一ノ鹿有テ、門ヲ突テ入来テ、此ノ經ノ案ノ前ニ立テ、頭ヲ擧テ舐ル。(巻六第四十五話)

例⑯の場合「奏請兵」を敷衍する際に、「責メ来ル」を補っているのは、これはもちろん「責ム」の一語だけでも十分用が足りるはずであり、例⑮、⑰、⑱の場合、「出」、「近」、「入」をそれぞれ「出ツ」、「近ヅク」、「入ル」で訳しても十分であろう。しかし、ここはいずれも原漢文 A 地点から B 地点への移動、接近を表す表現に、敢えて「～来ル」という具体的な方向性を付与して訳した訳者の苦心は、前者のやや抽象的な表現に対して、

²⁷ 4 例とも「キタル系」語彙と訓む。

より具体的な、しかも語り手、登場人物の視点を重ね合わせるようにしたと見るのが妥当であろう。すなわち聞き手を説話に引き込むような語り口を意図的に作り上げようとする意欲の現れではないかと考えられる。

以上のような説話、語り口によって必然的に要求されるような「キタル」系語彙の使用と平行して、もう一つ考えられるのは、やはり他ならぬ「キタル」が選ばれた理由として、漢文訓読に由来する語彙ではありながら、とりわけ「～キタル」は和語の「～ク」と平行する語形であり、語構成としても自然なものであることによって、「キタリ～」ほど漢文訓読語的ではないという文体的な性格がまず考えられる。そしてさらに、訓点語としての「キタル」系語彙は、もはや訳者の文体の一部として漢文訓読体に大きく依存しながらも、すでに漢文訓読体そのものからは一歩離れたところに形成されたもの、すなわち和漢混淆文という文体の一部であったと見るべきではないかと考えられる。

これまで見てきた「来」の訳語に見るような「～キタル」系語彙の用法の意味するところは、一般的に和漢混淆文の文体を論じる際、とかく和語か、漢文訓読語か、という二元対立的な構図を考えることよりも、我々に、和漢混淆文体そのもの、仮にその前に漢文訓読体や記録体があったとすれば、和漢混淆文体のもととなるものも含めた形での漢文訓読体の独自の成長、それは往々にして漢文訓読語、漢文訓読体への抵抗、反発としての側面に眼を向けさせることではないか。

以上指摘したことは、「～テキタル」に属する C3 例、BI1 例にも通じる。用例は次の 1 例を挙げるに止める。

㊸此是毘沙門第二太子蛭健。領兵制陛下意。(『要略録』・中・58²⁸):「……此レ、毘沙門天ノ第二ノ子獨健、数ノ兵ヲ随テ来テ陛下ニ副ヘル也。……」(巻六第九話)

一方、『要略録』の「来」の訳語の中で、「来集」を「集来ル」に訳すような例は、『要略録』との間で見ると限りむしろ異例ともいえるべきものである。事実、「キタリ～」のような語構成が日本語としては生産性がないのであってみれば、漢語で多く用いられる「来～」による複合動詞、又は動詞が連続する場合の訳語として最も取るべき形は「来テ～」になる。「～テ」によっていったん中止し、そして次の動詞を続けるのである。たとえば原典でよく使われる「来告」、「来語」の訳は次のように、語順の関係で「告げる」の前に「汝ニ」のような行為の及ぶ対象を介在させざるを得ない 2 の場合はもちろん、1、4

²⁸ 新日本古典文学大系『今昔物語集』第二冊(小峯和明校注)は 38 になっているが、58 の誤りのようである。

のように「来ル」と「告ル」が相接する場合でも「来テ～」としている。

- 1 皆離地獄。方生淨土。時熟以是因縁來告。(『要略録』・上・14) :
皆、地獄ヲ免レテ、淨土ニ生ルハ時、至レリ。此、偏ニ我等來テ告ル也。(卷六語第十八話)
- 2 以歡喜故。來告所因。(『要略録』・中・20) :
『…我レ、歡喜スル故、來テ汝ニ告ル也』ト。(卷六第三十八話)
- 3 又夢有異服官人。捧旗來告曰。(『要略録』・中・20) :
其ノ後、書生亦、夢ニ、「官人、幡ヲ捧テ來レリ、更ニ、此ノ國ノ人ニ不似ズ。書生ニ告テ云ク、……(卷六第三十八話)
- 4 師坐蓮花。來語曰。(『要略録』・中・9) :
僧愈、蓮花ニ坐シテ來テ語テ云ク、……(卷六語第三十六)

中には3のように、「捧」「来」「告」「曰」と動詞が四つ続いている場合は、「捧来」と「告曰」に二分し、二つの文として訳されるなど「～テ」の重複を意図的に避けようとする工夫も見られる。結果的に「キタリテ～」形ではBIの1例(これととも、「キタル」2例、「～キタル」1例とほぼ同数である)を除けば、A,BII,Cはいずれも他の語形より多く用いられ、取り分けAに属する「来テ」の形が「キタル系」語彙の中で最も優勢になった原因であると考えられる。もちろんその背景には原典の中国語では「来～」による複合動詞が頻用されるということを反映させてのことである。

既に第三節で見たように、訓点資料でも平安初期のものに、漢語「～来」の複合動詞を「～テ来ル」と訓む傾向があった。それを考え合わせれば、「～キタル」の場合、語構成的に何ら無理がなく、和文の中では相当生産的な複合動詞の形式であるにもかかわらず、複合動詞とせずに「～テ来ル」としたことの意義が改めて認識される。「キタリ～」の場合、語構成的に無理であることも大きく「来リ～」形の使用への「抵抗」として働いたものと考えられる。因みに、『要略録』に原典を持つ「キタリ～」4例の内、「来下ル」は3例、卷二第二十一話(出典:『要略録』上・45)に2例、卷六題三十一話(出典:『要略録』上・32)に1例、卷六第十七話(出典:『要略録』上・13)に「来迎」に対応する「来リ臨給フ」1例である。卷二、卷四中『要略録』を出典とする説話は全部で五話あり、「来」の訳し方は、Aは6例で最も多く、BII,Cは1例ずつ、出典中の「来」を「キタル」系語彙に訳した割合が卷六、七より圧倒的に多い。卷二、四と卷六、七の間のこうした違いは何を意味するのか、詳らかにしないが、訳者の違い、同一訳者の場合でも翻訳態度の違いとして解釈される余地がある。本稿は、卷二、四中の該当話数が少数のため、集計は卷六、七と区別しなかったが、事実として指摘しておきたい。

因みに、「来下スル」1例は、巻七第七話（出典、『要略録』中・52）に用いられた「来下」3例中の1例、残る2例は「キタル」である。

このように見てくると、同じ「キタル」系語彙の中でも、漢文訓読語の度合いが異なることが明らかである。仮にその間にいくつかの段階があるとすれば、それが最も高いのは「来り～」形であり、続いて「～キタル」形、そして「キタル」・「～テキタル」・「キタリテ」形という順になるうか。それによって漢文訓読体の文体指標として「キタル」・「～テキタル」・「キタリテ～」の価値が減じるわけではないが、和漢混淆文を考えるときに考慮すべきことであろう。しかもD類のように中国語と日本語の違い、個別的な語彙「来」と「キタル」の違いによっても「キタル」の使用を忌避させることがあり、語り口や登場人物の視点の必要に応じて「キタル」系語彙を補うことを考慮すれば、「キタリ～」形のような逐語訳的な漢文訓読語を除くAに属する他の語形の使用も、あくまで訳者の目指す語り口としての説話に相応しいもの、原文の「来」と日本語「キタル」の意味や視点の一致によるものと解釈してよさそうである。そして、各語形を通じて、BI, BII, Cは程度の差こそあれ、いずれも「非漢文訓読的」な要素として自由度の高い用法に属し、ここに訳者の文体、ひいては和漢混淆文体の存在を窺わせていると考えられる。一方、『冥報記』に出典を持つ説話について「来」の訳語を調べた結果は表2、3である。

表2：巻六、七中『冥報記』出典の説話における「来」と「キタル」²⁹

両者の関係	キタル	～キタル	～テキタル	キタリ～	キタリテ～	小計	%
A	8	2	3	2	4	19	42.22%
BI	2	0			5	7	15.56%
BII		2	1		5	8	17.78%
C	4	4	2		1	11	24.44%
小計	14	8	6	2	15	計 45	100%
D	0						
E	0						
F	4						

²⁹ 巻六中『冥報記』を出典とする3話のうち、「キタル」を含まないのは1話、巻七中『冥報記』を出典とする17話のうち、「キタル」を含まないのは2話であり、巻六、七合わせて17話が対象となる。先の分析に従って、第七巻のうち、「イデク」と訓む用例6例、C類「心出来テ」（巻七第十八話）、BI類「色出来タリ」（巻七第二十五話）、C類「乱出来ル」2例（巻七第二十八話）、BI「風出来テ」（巻七第二十九話）、C類「出来タリツル火」（巻七第四十三話）を除いた。そのなかで、「色出来タリ」は「イデキタリ」、「出来タリツル」は「イデキタリ+ツ」であり、「乱出来ル」は「来」の全訓捨仮名「くる」2例に準じて、「イデクル」と訓んでおく。すべて和語の定型的な表現であり、同じ内容には同じ表現を当てようとする訳者の姿勢が窺われる。この姿勢がこのような和語のつきいる隙を与えたのではないかと考える。

表 3：巻九中『冥報記』出典の説話における「來」と「キタル」³⁰

両者の関係	キタル	～キタル	～テキタル	キタリ～	キタリテ～	小計	%
A	8	2	2	4	18	34	52.31%
B I	3	2			2	7	10.77%
B II	1	4			1	6	9.23%
C	4	1	5	2	6	18	27.69%
小計	16	9	7	6	27	計 65	100%
D	0						
E	0						
F	8						

まず、表 2 と表 3 との間に、特に A 類に属する訳語の割合に開きがあること以外は、両方ともほぼ表 1 に示した分布と相似しており、A と C に当たる訳し方が両方とも高い割合を占めていることは、両者の共通した翻訳態度、文体意識の現れとして注目しておきたい。『要略録』を出典とする説話について示したように、「キタリ～」形の使用も巻七に 2 例、巻九に 4 例と限られたものであったことと共通している。一方、『冥報記』巻六、七と『冥報記』巻九の間で、『要略録』同様、A 類と C 類は共に高い割合を占めていることは、両者の間に共通した翻訳態度、文体意識を窺わせる。巻六、七、九を平均すれば一層差が縮まることも両者の共通した一面を物語っている。表 1 と表 2、3 を通してみると、『要略録』に基づく説話と『冥報記』に基づく説話との主な共通点は以下の三点に見られる。

- 一、文意によって補った「キタル」、「～テキタル」、「～キタル」は話中人物に視点を合わせて語るという物語の語り口に相応しいものである。
- 二、BI 類のなかで、「至」→「キタル系」語彙への翻訳 8 例、「帰り来ル」2 例、「将来ル」1 例あり、C 類の語彙（出来ルなど）とともに特定の語彙に偏る傾向が見られる。

このような共通した翻訳態度、文体意識がある一方で、両者の間には次のような相違点が指摘できる。

- 一、表 2、3 には、D 類に属する用例がないこと。
- 二、A 類の中だけでなく、C 類にも「キタリ～」の語形が比較的多く用いられていること。

³⁰ 巻九中『冥報記』を出典とする 28 話のうち、「キタル」を含まないのは 9 話である（部分的な出典とされる第十三話は除外した）。

三、『冥報記』を出典とするすべての説話を通してみても、個々の説話を見ても、『要略録』を出典とする説話より漢文訓読臭が強いこと。

次に『冥報記』に基づく説話の中から、D 類の用例を取り上げる。

- 1 然而比來寄宿者輒死³¹。（『冥報記』・中・1）：
『…但シ、前々此ノ廟ニ来リ宿スル人、必ズ死スル也。…』（卷七語第十九話）
- 2 忽見生平相識僧来入兵圍行内。（『冥報記』・中・12³²）：
此ノ僧、兵者ノ圍タル内ニ来リ入ル。（卷七語第四十七）
- 3 初死時。見四人来至其所云。（冥報記・下・23）：
「我レ、初テ死シ時ニ、見レバ四ノ人、其ノ所ニ来リ至テ云ク、……」（卷九第卅四話）
- 4 未及言。廳上有官人來坐。怒瑤曰。（冥報記・下・23）：
未ダ詞ヲ不出ザルニ、廳ノ上ノ座ニ官人有テ、来リ坐シテ怒テ、王瑤ニ云ク、……（卷九第卅四話）
- 5 仁蒨見景兩客來坐。（冥報記・中・15）：
其ノ時ニ、仁蒨、景ガ二ノ客ヲ相具シテ、来リ坐スルヲ見ル。（卷九第卅六話）
- 6 是以數來過此。與君相遇也。（冥報記・中・15）：
「…此レニ依テ、我レ、數々、此ヲ来リ過ルニ、君ト常ニ會ヘル也」ト。（卷九第卅六話）

例 1 は恐らく本来時間を表す「比來」の「来」を「キタル」と誤解したために「宿スル」との複合を起こしたと考えられるが、先に『要略録』で見たように「来」に動詞が後続する場合「来テ～」の形で訳すことはもちろん可能であり、例 2～6 も同様に可能であったはずである。しかし、この 6 例はいずれも漢語の逐語訳的な語形を避けようとする意識がなく、むしろ余剰な表現として用いていることは、もちろん訳者の翻訳態度、文体意識の然らしめるところであろうが、それよりもここで注目したいのは、『冥報記』を出典に持つ「キタリ～」形 4 例はそれぞれ、第九卷第三十四話、第三十六話に 2 例ずつ用いられ、しかも同じ説話には、従来漢文訓読語とされる「～トイヘドモ」も用いられていること（第三十四話に 1 例、第三十六話に 6 例）である。やはり当該説話の文体の中において必然性があつての使用と見るべきであろう。これによって「キタリ～」形が漢文訓読語としての高い指標性が裏付けられる。もちろん、卷二、卷六、卷七に用いられた「キタリ～」4 例には「トイヘドモ」と共起しないという事実も考慮しなければならないが、これはそれらを含む説話はいずれも比較的短いものであることと関係していると思われ、いくつかの文体指標の共起を漢文訓読体の堅さの度合いを測る手段とすることを否定することはできない。取り分け卷九第三十四話、三十六話は漢文訓読体の勝

³¹ 大正蔵本は「来」と「寄」の間に句点を入れるが、文意によって連続する。

³² 小峯和明校注新日本古典文学大系本『今昔物語集』第二冊は、出典を冥報記・中・13 とするが、『冥報記の研究』第一卷所収の釈文は 12 に作る。後者に従って、12 に改める。なお、大正蔵本は「来」と「入」の間に句点を入れるが、文意によって連続に改めた。

った文体とみることができる。

以上のように、『要略録』と『冥報記』を出典とする翻訳話の間に、かなり共通した文体的な一面、それが恐らく漢文訓読体から脱胎したものには違いないが、和漢混淆文体ともいべき文体の存在を窺わせるような現象が認められた。同時に、『要略録』と『冥報記』を出典とする翻訳話の間には、単純に同一訳者とは考えにくいような文体的な差異も見られた。このことは果たして「キタル」系語彙だけにとどまる現象なのか、それとも他に類似する現象があるのか、次稿は一部「キタル」系語彙にも訳された「有」の訳語と「有テ」の用法についてさらに検証してみたい。

5.2 訳語に見る訳者の翻訳態度、文体意識―「有」の場合―

前節で、「来」の訳語を調査した際にならって、以下の分類に基づいて、巻一から巻九までの説話の内、『要略録』、『冥報記』に出典を持つ説話について、人、又は人に準ずるものを主語に持ち、後に動作性の動詞が続く構文の「有」の訳語を対象に調査した。

- A. 出典の「有」を「有テ」とした場合
- B. 出典には「有」がないのに、「有テ」とした場合
 - I. 出典にある「有」の類義語を「有テ」とした場合
 - II. 出典にある「有」を含意する語を「有テ」とした場合
- C. 出典にはなく、撰者自身が文意によって加えた場合
- D. 出典の「有」を他の語に置き換えている場合
- E. 字音語とした場合
- F. 出典の「有」を全く無視した場合

結果は表 4、5 の通りである。

表 4：巻二、四、六、七中『要略録』出典の説話における「有」と「有テ」の関係³³

両者の関係	有テ（書き出し）	文中	小計	%
A	1	9	10	25%
B I		2	2	5%
B II		1	1	2.5%
C	1	26	27	67.5%
			計 40	100%
D	1	6	7	
E		0	0	
F		9	9	

³³ 「有客先到。如廁。客有テ、先ヅ来テ廁ニ行テ、……」（巻九語第十九、出典：冥報記・下・13）のように、人（鬼神を含む）を主語に持ち、後に動作性の動詞が続く場合のほか、「其中有語曰：其ノ者ノ中ニ音有テ云ク、」（巻六語第十三、出典：冥報記・中・8）のように人が介在するものを含めた。

表 5：卷六、七、九中『冥報記』出典の説話における「有」と「有テ」³⁴

両者の関係	有テ（書き出し）	文中	小計	%
A	1	23	24	57.14%
B I		0	0	0%
B II		1	1	2.38%
C		17	17	40.48%
			計 42	100%
D		8		
E		0		
F		3		

表 4、5 を通してみると、まず表 4 のなかで、C 類の用例が先に見た「来」と「キタル」系語彙の場合よりもかなり高い割合を占めているということが注目される。調査対象とした「有」は山田孝雄他（日本古典文学大系『今昔物語集』二補注、345 頁）によってつとに指摘されていた、主格の用法に当たるものであり、今昔物語集では、主格を表すのに「格助詞を用いないのを通例とする」ということを考えれば、このような用法はもともと漢文訓読語的なものであることと無関係ではないことは容易に察することができる。しかし、こと C 類に属する用例は、格助詞とまで断定できなくとも、格助詞的な役割を果たすことにおいて、もはやもっぱら漢文訓読語の指標としてのみ有用なだけではない。本来ならばなくてもいいところに、わざわざ補わなければならないということの必然性はただ単に漢文訓読語の指標としての「有テ」を越えており、まさに山口佳紀氏によって指摘された和漢混淆体という文体の存在を伺わせるからである。先に見た「キタル」系語彙と原漢文の「来」との場合よりも、C 類に属する用例が多く見られることの意味はまずここに求められるのではないか。BI、BII 類の用例は『要略録』を出典とする説話のみならず、『冥報記』を出典に持つ説話でも、極少数に限られることも、「有」の語彙的な意味による制限（類義語やそれを含意する語彙が少ないこと）もあろうが、数字的にはむしろ「キタル」系語彙よりも、和漢混淆文体の指標としての「有テ」の優位さではないかと考えられる。これに対して、表 5 では、A 類が最も多く、C 類に属する用例の割合は先に見た「来」と「キタル」系語彙と接近しているという現象も、先に触れた、『冥報記』を出典とする一連の説話の漢文訓読臭の強さを示していると考えてよさそうである。ここにも共通した文体意識、翻訳態度のなかでも、漢文訓読体に対する姿勢の違いが認められる。表 4 と表 5 の間に、A 類から C 類までほぼ同数の用例がありながら、F 類において前者は 9 例、後者は 3 例ということも、同じことの延長線上にお

³⁴ 卷六、七と卷九の間に統計的に有意な差が見られなかったのも、一緒に集計した。

いて理解することが可能である。このような全体的な共通点と相違点をふまえて、両方の D 類の用例から見ていきたい。

D 類の用例はちょうど先に表 2、3 に示した、B 類の裏返しであるので、先に示したデータをここに数字のみ繰り返すと、まず表 4 で D 類に属する文中の用例 6 例のうち、原文の「有」を「キタル」系語彙に訳したものは 4 例、敬語の「在マス」に訳したものの 1 例、「住ム」に訳したものの 1 例になる。例を挙げるまでもなく、「有」を「キタル」系語彙に訳したのは、登場人物や登場するものが静的な存在として導入されるのではなく、語り手と話中人物に置かれた視点によって語るという語り口のために必要なものであり、「住ム」の例はより具体的な存在の仕方を「住ム」によって表現しているものである³⁵。残る敬語「在マス」はそのまま「有」と同義の存在表現としてむしろ A 類に準ずるものと考えてよく、この 1 例を除く他の用例はいずれも具体的な表現であることは前項で示した翻訳者の翻訳態度に通じ合うものと言える。

一方、表 5 の D 類に属する文中の用例を見てみると、全 8 例中、「出来ル」4 例、「来ル」4 例と、すべて「キタル」系語彙である。「有」の側から見れば、特定の語彙に偏っているという事実は指摘できるが、より重要な事実はやはり C 類の用例が多数を占めていることである。次に用例の分析に移る。

先例にならって、ここでも「有」の訳し方³⁶と「有テ」の使い方を、(1) 説話として必然的に要求される場合、(2) 説話そのものとして必然性がなくても、訳者が何かの必要を感じて追加する場合、(3) 中国語と日本語の違いを反映する場合、という三つの観点から考えたい。まず、(1) に属するのは、物語の書き出しの部分の用例である。該当するのは次の 2 例である。

① 温州司馬。得長病欲衰死。(『要略録』・上・28) :

今昔、震旦ノ□ノ代三、溜洲ノ司馬有テ、身ニ重キ病ヲ受テ愈ル事无クシテ、久ク有リ。(巻六語第二十一)

② 其年二十七時。相師見云。君甚壽短。不可過三十一。(『要略録』・中・33) :

生年二十七ト云フ年、相師有テ、李通ヲ見テ云ク、「君ノ命極テ短シ、三十一ヲ不可過ズ」ト。(巻六語第四十七)

例①は「今ハ昔」に続く部分であり、例②はそれよりやや遅れて用いられているという違いはあるが、原典のように「温州司馬」のような「地名＋人名(職名)」の名詞句によ

³⁵ 今述べたような意味では、書き出し部分の「住ム」1 例も同じである。

³⁶ 書き出しの部分に原文では、いくつかの型があるが、「～有～」はそのなかでも有力なものであるが、書き出しの部分では殆ど「～ニ有(リ)、～」に訳されている。

って登場人物を導入するような書き出しは今昔物語集ではないようである。そうした表現の違和感を回避するために、「震旦ノ□ノ代ニ」のように、時間を設定し、それに合わせて「有テ」が用いられていたと考えられる。この場合、後続する動詞が動作性の低いもののために、「有テ」はむしろ「居テ」という意味に解してよいものである。例②との違いもここにある。「相師有テ、李通ヲ見テ云ク、」のように読点を入れることが一般的のようであり、書き出しという人物設定の文脈中であって、読点を入れて「居テ」の意とし、もし後続する動詞との間の「主格名詞＋動作性動詞」との関係の場合、連読することも可能であり、要するに書き出しそのものではない、存在とも主格を示す表現とも解釈できるのである。以上の2例のように、説話の構造的な要因によって用いられた例ほど顕著ではないが、「有テ」にはさらに先行する表現、特に場所を表す表現との関連で用いられる例もある。

③聞像緣起於耆舊。曰。昔此國神鬼喬亂。人民荒廢。(『要略録』・上・29)：

而ルニ、此ノ像ノ緣記ヲ聞ケバ、傳テ云ク、「昔シ、其ノ國ニ鬼神有テ人民ヲ悩乱ス。此レニ依テ、國荒レ廢ル。(卷六語第二十七)

4 夜夢前鬼來召。引璞上高山。山嶺有大宮殿。既入。見眾君子迎謂曰。此人修福。不得留之。可放去。即推璞墮山。於是驚悟。(冥報記・中・20)：

既ニ其ノ宮殿ニ入ルニ、宮殿ノ内ニ、衆有テ迴〔ハク〕ヲ見テ云ク、『此ノ人ハ、善根ヲ修セリ。此レヲ不可止ズ、可放去シ』ト云テ、即チ、迴〔ハク〕ヲ推テ山ヨリ墮ス』ト思フ程ニ、驚キ悟ヌ。(卷九第卅二)

⑤聞空中音樂西來。須臾即還矣。(『要略録』・中・25)：

其ノ時ニ空中ニ音樂有テ、西ヨリ來テ須臾ニ還ヌ。(卷六語第四十三)

この3例はいずれも原文の該当する名詞に「有テ」を加えて訳した場合であるが、例③は「此國」と「其ノ國ニ」と場所を表す名詞としたために、「鬼神」に「有テ」を加える必要が生じたのではないかと考えられ、例④、⑤も同じように解釈できる³⁷。そして、次の例⑥も、先行する「夢ニ」との呼応において用いられていると見て良さそうである。

⑥是時隣家夢。鹿是待母。屠兒待父。各依業故受異身。待自為寫。故來受其化而已(『要略録』・中・31)：

其ノ後、隣ノ家ノ人ノ夢ニ、「人有テ語テ云ク、『彼ノ鹿ハ姚待ガ母也、屠兒ハ此レ、姚待ガ父也。各業ヲ造レルガ故ニ此等ヲ身ヲ受タリ。而ルニ、姚待、父母ノ為ニ四部ノ大乘ヲ寫シ奉レルガ故ニ、各來テ其ノ相ヲ示ス也』ト告グ」ト見テ、夢メ覺ヌ。(卷六語第四十五)

次の例⑦は⑥の類例である。

³⁷ 「見眾君子迎謂曰。」を「宮殿ノ内ニ、衆有テ迴〔ハク〕ヲ見テ云ク、」とするのは、主客の関係を逆センさせていることはここは不問に付す。

- ⑦在於像前夢。一人冥官。將金紙牒書曰。(『要略録』・上・15)：
而ルニ、道如、此ノ像ノ御前ニシテ夢ニ見ル、「一人ノ冥官有テ、金紙ノ牒書ヲ持来テ、道如ニ告テ云、……」(巻六語十九)

次に先行する場所を表す表現との呼応において用いられる「有テ」の例に次いで注目されるのは、「見ル」が先行する場合であり、以下の3例である。

- ⑧即見庭中。吾所殺生百千萬。向王各各白非分奪命由。(『要略録』・中・4)：
即チ、庭ヲ見レバ、我ガ殺セリシ所ノ生類百千万有テ、王ニ向テ各非分ニ命ヲ被奪レタル由ヲ申し合ヒタリ。(巻六語第三十五)
- ⑨明旦。見其[10]主被鎖。嚴兵守衛。將入官所。見奴謂曰。(『冥報記』・下・4)：
其ノ明口朝タニ見ルニ、其ノ身被鎖テ、嚴シキ兵有テ、守リ衛テ官ニ將入ルニ、我レヲ見テ宣ハク、(巻七語第三十一)
- ⑩父令兒出應之。見一人云。官喚汝侵。(冥報記・下・8)：
兒出デ、見レバ、一ノ人有テ云ク、「官ヨリ汝ヲ召ス。速ニ可參シ」ト。(巻九第廿四話)

この3例の原文にはいずれも「見」があつて、それに呼応する「有」を持たないが、恐らく「見有」又は「見……有」の表現様式を踏まえているのであろう。そして、このように他の表現との呼応において用いられるという意味では次の例⑪も同じである。

- ⑪良久而曰。吾初悶絶之時。二人馬頭牛頭。以火車來投入吾身。(要略録・上・9)：
我レ、初メ馬ヨリ落テ悶絶セシ時、忽ニ、馬ノ頭・牛ノ頭ノ鬼有テ、大ナル車ヲ持来ル。(巻六語第十一)

ただ例⑫の場合、「忽」も「有」も原文にはなく、両方とも文意によって補ったものであり、それだけ背景にある「忽有～」の形式の存在が訳者の文体意識のなかで自由度の高いものであろう。とはいっても、例①、②のような書き出しの部分といい、先行する場所表現、「見ル」や「忽ニ」のような表現といい、程度の差こそあれ、いずれも説話という表現様式の構造に依存するものである。その意味では上記の用例のなかで、例⑪のようなやや自由度の高いものもあろうが、総じて高い自由度を持つものではない。それは、以下のようなC類に属する①、②、③のような、説話の構造的な要因、先行文脈的な要因が一切考えられないような場合と比較すれば一層はつきりする。両者の持つ文体的な意味合いも自ずから異なることはいふまでもない。以下各類の用例数と代表的な用例だけ挙げておく。

C・①類：原典に主格名詞があつて、訳文では「有テ」だけ補ったもの(全17例)。

- ・年未弱冠時。異病死。三日而蘇。(『冥報記』・中・13)：

未ダ弱冠也ケル時、俄ニ病ヲ受テ死ケリ。父母有テ泣キ悲ムト云ヘドモ、更ニ力不及ズシテ止ヌ。而ル間、三日ト云フ夜半許ニ活ヌ。(卷七語第四十七)

- ・主司曰。此人死三日。家人為請僧設齋。每聞經唄聲。鐵梁輒折。故不得也。(『冥報記』・下・4) :
守衛ノ人ノ云ク、『此ノ人死シテ三日ニ、家ノ人有テ、此ノ人ノ為ニ僧ヲ請ジテ齋會ヲ設ク。經唄ノ聲ヲ聞毎ニ、鐵ノ梁輒ク折タルガ故ニ、油ヲ不押得ル也』ト。(卷七語第三十一)
- ・其妻妾請眾僧。七日七夜。讀誦藥師經。(『要略錄』・中・32) :
其ノ時ニ、其ノ妻有テ、思ハク、「此ノ病、當ニ人ノ力不及ジ。然レバ、偏ニ三寶ニ可祈禱シ」ト深く思ヒ得テ、家ヲ掃ヒ清メテ衆僧ヲ請ジ入レテ、香ヲ焼キ華ヲ散シテ、七日七夜藥師經ヲ令轉讀ム。(卷六語第四十六)
- ・時獄官白閻魔大王。(『要略錄』・中・7) :
其時ニ、獄率有テ、此ノ希有ノ事ヲ見テ、閻魔王ニ此ノ由ヲ申スニ、(卷六語第三十四)
- ・須臾。吏引入諸囚。至官前。(『冥報記』・中・13) :
而ル間、官人有テ此ノ被捕レタル者共ヲ引テ官ノ内ニ入テ、次第ニ此等ヲ問フ。(卷七語第四十七)
- ・公謝罪請為追福。四大許之。一白犬不許。曰。(冥報記・下・20) :
安公ノ云ク、『我レ、罪ヲ謝シテ汝等ガ為ニ追テ善ヲ修セム』ト請フニ、四ノ犬ハ、既ニ、此ノ事ヲ許ス。一ノ白キ犬有テ此ノ事ヲ不許ズシテ云ク、……(卷九第卅二話) :
- ・躊躇又至一門。門吏曰。(冥報記・下・23) 王 [ゾク]、一ノ門ヲ走ル。門ノ吏有テ、王 [ゾク] ヲ見テ云ク、(卷九第卅四)

C-②類：原典の主格名詞と異なる表現を用いたもの：全5例

②・1：原典の主格名詞に他の表現を追加したもの

②・2：原典の主格名詞を他の表現に変えたもの³⁸

- ・守護持般若者。乃至聞一句者。敬之如佛。持佛母故。不可廢退矣。(『要略錄』・中・52) :
此レニ依テ、「人有テ、般若經ヲ受持シ、若ハ讀誦シ書寫セム所ニハ、必ズ天人來テ守護セル也」ト可知シトム語り傳ヘタルトヤ。(卷七語第七)
- ・沙門大統法師上奏曰。(『要略錄』・中・63) :
其ノ時ニ、一人ノ沙門有テ、奏シテ云ク、(卷七語第十四)

C-③類：文意によって主格名詞、「有テ」の両方を補ったもの：全7例

- ・經七日住隣縣有富家。其婦頓死。更求他女。(『要略錄』・上・24) :
其後、七日ヲ經テ、隣ノ里ニ一人ノ富人有リ、其ノ妻頓死シヌ。然レバ、其ノ夫有テ、妻ヲ求ム。(卷六語第二十二)
- ・聞陳說花藏世界相。情恒慕樂。(『要略錄』・中・7) :
而ルニ、僧有テ、花藏世界ノ相ヲ説ク。定生、此レヲ聞テ歡喜シテ、常ニ心ニ懸ケテ彼ノ土ヲ願フ。(卷六語第三十四)
- ・或至親友家。見書寫大品般若。(『要略錄』・中・53) :
其ノ時ニ、志達、親キ友ノ家ニ至ル。家ノ主有テ、大品般若ヲ書寫ス。(卷七語第八)
- ・眾皆歎異之。以為入三昧也。(『冥報記』・上・2) :
弟子等皆歎キ合ヘルニ、智リ有ル人有テ云ク、「此ノ人ハ三昧ノ定ニ入タル也」ト。(卷七語第四十六)

³⁸ 訳語と判断されるものは同一語と見なし、C-①類に入れた。

このように、C・①、C・②、C・③を通してみると、まず気づくのは、先に「キタル系」語彙について見たときに比べて、C・②の用例からは日本語、中国語の文法的な違いを反映させるような、要因はまったく見られないことである。そして、C・①、C・②、C・③のなかでも、「キタル系」語彙の際よりも、訳者の文体意識のなかでの自由度が C・①、C・②、C・③の順に高まるという傾向が顕著に認められることも、同じく訳者の文体の存在を窺わせるものと考えてよさそうである。この点についてももう少し詳しくみてみたい。

以上見てきた、C・①、C・②、C・③と先に見た例 1～11 までの諸例との違いは何よりも C・①、C・②、C・③の三類を通じて、「有テ」を用いなければならない要因は原漢文の語形とはまったく無関係なことである。それでは、原文にないものをわざわざ補う必要はどこにあるのだろうか。ここで注目したいのは、表 4,5 で集計した、「有+名詞+動作性動詞」という表現形式の存在である。実は、この形式に於いて「有テ」が多く補われているのである。これは時間や場所のような特定の先行表現とは無関係に、この文型において「有」が頻用されているという事実に基づく。この事実の意味はなにか、といえば、恐らく訳者の文体意識のなかで、ある程度抽象化された、類型的な表現としての「～有テ～動作性動詞」のような文型があったのではないかと考えられる。これは原漢文そのものの表現類型をそのまま帰納したものではないことは、実際 C・①、C・②、C・③はいずれも原文では「有」を必要としないものであるにもかかわらず、この類型化された表現は「有」を持つ原文をそのまま訳す場合に対し、相当高い割合で補われているということによっても明らかである。かといって、このような「有テ」は決して和文脈のものでもないところに、和文体でもない、漢文訓読体でもない、第三の文体の存在を窺わせているのではないか。それは漢文訓読体そのものではないが、それに胚胎しながらそれからとはかく遊離しがちなものであり、しかも和文体でもないという、「漢文訓読体」とは正に不即不離の関係にあるものとして考えられる。「有」、「有テ」と「来」と「キタル系語彙」との共通点は何よりもこのような第三の文体を示唆するのである。

ここで、改めて何故このような「有テ」の用法が起こりえたのか、言い換えれば、このような主格表現としてなぜ「～有テ」が選ばれたのか、ということを考えてみたい。従来の『今昔物語集』の文体についての研究は、一部の例外、たとえば山口佳紀(1966)、山口仲美(1970)の一連の論文のような例外的なものを除けば、漢文訓読語に由来する語彙については、それをそのまま漢文訓読体を示す指標として用いることが多かったが、厳密には漢文訓読語そのものと和漢混淆文に用いられたものとの区別を一旦明確にする必要があるのではないか。後者のことを特に和漢混淆語と呼んでもよいくらい、和漢混

清文体にとって独自のものである「有テ」の主格用法のようなものについては特にその必要を感じる。ここには、純漢文訓読体とは一線を画しつつ、用法としては、一方には漢文訓読の「有～」を「～有テ」という形式を襲いながらも、内実はむしろ和文の主格を表す「～ガ・ノ＋動作性動詞」という意味機能、及び形式からの類推が働き、結果的には漢文訓読の形式に和文の意味機能を盛り込んだために、このような「～有テ」の使用が生じ、しかも局所的とはいえ、一時大量発生をもたらしたのではないか。すなわち、「～有テ」は、漢文訓読の訓法「～有テ」を通して、漢文の形式「有～」を和語の構文（主格構文）において解釈したために起こった、和漢混淆文独自の主格用法なのである。このような「有テ」は漢文訓読語としてのそれとは、似て非なる関係にあるといってもよい。否、「似て」いるのは形式、極言すれば語形のみであって、意味機能はもっぱら和文の主格を表す構文「～ガ・ノ」なのである。和語の側からこのような「有テ」を見れば、むしろ和文の主格を表す構文の和漢混淆文での等価物として見ることも可能である。これが和漢混淆文体における「有テ」の性格なのではないか。

因みに、「このような用法は、一方においては説話であるために、一方においては、翻訳の対象となった漢文における措辞に惹かれて起った事と思われるが、巻十に入るやその数が激減することは、その何よりの証であろう。（日本古典文学大系本『今昔物語集』第二冊補注：346頁）」との指摘もあるが、「説話であるために」という要素については、書き出し部分の用例がそれに関連するが、このような例はわずか2例、むしろ少数であること、「漢文における措辞に惹かれて起った」というのは表5,6のように、いずれも過半数未満であること、を指摘すれば、十分であろう。やはり第三の可能性として和漢混淆文体の存在を考えなければならない。

5.3 文体意識と翻訳態度をめぐる一「忽見・不見」と「夢見・見」の場合―

第一項と第二項では、「キタル系」語彙と「有テ」の用法を例に、和漢混淆文のなかには、和文体とはもちろん、漢文訓読体そのものとも異なる文体、和漢混淆文体ともいべき文体の存在を窺わせる現象を指摘してきた。そして、『要略録』と『冥報記』を出典とする一連の説話の間では、訳者の翻訳態度や文体意識の違いを示唆するような現象が見られた。本項では、『要略録』と『冥報記』を出典とする一連の説話の間では、訳者の翻訳態度や文体意識の違いを示す手がかりはほかにないか、両者の違いがはっきり認められた場合、その違いを超えたところの、今昔物語集では果たして和漢混淆文体という第三の文体が考えられるかどうか、という二点について、特に表現の類型化の傾向を中

心に、さらなる検証を進めたい。ここでは、同じく『要略録』と『冥報記』を出典とする一連の説話を対象に、説話の中に「有」と「来」同様頻用される「忽見・（忽）不見」、そして「夢見」・「見」の訳語を調べた。結果は表6の通りである。用例を最小限に挙げるために、表に用例を詳しく記した。凡例は次の通りである。

- 一、人や物が話中人物の目の前や遠くに現れり消えたり、又は人物の行為が展開されるとい
う文脈に限って集計した。
- 二、「俄見」（巻七第四十二話）1例は「見」に集計した。
- 三、意識的に物を視ようとする意味の「視」やそれと同じ意味の「見」は除いた。
- 四、「面会スル」の意に用いられる「見」やその関連語彙「遇見」（「遇見」の誤字と思われ
る「過見」を含む）は除いた。
- 五、原典にあって、訳文に該当する箇所が見あたらないものは除いた。

表6：「忽見・不見・見・夢見」の集計³⁹

語形・出典	『要略録』	小計	語形・出典	『冥報記』	小計
見：見ル	13	19	見：見ル	64	68
見→○	2		見→○	2	
見→「来ル」	4		見→「會（値）フ」	2	
夢見：夢ニ……ト見テ 夢覺ヌ	2	2	夢見：夢ニ……ト見テ 夢覺ヌ	3	3
夢見：夢ニ……如此ク 見テ夢覺ヌ	1	1	夢見：夢ニ見ル様…… ト見テ夢覺ヌ	1	1
忽見：忽ニ見ル	0	0	忽見：忽ニ見ル	11	11
忽見：見ル	2	2	忽見：見ル	2	2
忽見：見付ル	0	0	忽見：見付ル	1	1
不見：掻消ツ様ニ失ヌ	2	2	不見：掻消ツ様ニ失ヌ	0	0
不見：失ヌ	2	2	不見：失ヌ	0	0
不見：无クシテ	0	0	不見：无クシテ	1	1
不見：失テ不見ズ	1	1	不見：失テ不見ズ	1	1
不見：不見ズ	1	1	不見：不見ズ	2	2
不見：不見ズ成ヌ	1	1	不見：不見ズ成ヌ	3	3

まず、「見・不見」について、『要略録』を出典とする説話と『冥報記』の場合との主
な相違点は次の六点である。

- 一、『要略録』に「不見」の訳として和文脈由来の定型表現があり、『冥報記』にはない。両
者はそれぞれ「失ヌ」と「不見ズ」を中心として表現を選択している。
- 二、『冥報記』に「夢見」の訳として和文脈由来の定型表現があり、『要略録』にはない。
- 三、「見・不見」及び関連語彙について見るかぎり、『冥報記』に誤訳があり、『要略録』に
はつきりと指摘できる誤訳は見あたらない。
- 四、「見」を他の動詞「来」に訳す例は『要略録』にあり、『冥報記』にはない。
- 五、「見」の訳語として『冥報記』には、「～ヲ見ル」で文を終止する形式があるが、『要略

³⁹ 語形「見ル」には、「見レバ、見ルニ、見給フ」などの語形を含めた。

録』にはない。

六、「見」を「出会う」の意として「～ニ会（値）フ」と訳す例は『冥報記』にあり、『要略録』にはない。

以上の六点ほど対蹠的ではないが、なお相対的な違いとして次の三点が指摘できる。

- 一、全体的に『冥報記』のほうが原文「見」に対する「見ル」が一致する割合が高い（68:64）。
- 二、和漢両文脈の対蹠的な語彙の混在が『冥報記』には目立つ。例えば、「夢の形式」と「～トイヘドモ」の混在（巻九第十六、句読点抜きで 576 字）「夢ニ見ル様、……ト見テ、夢覺ヌ」 1 例、「～トヘイドモ」が 2 例用いられている⁴⁰。
- 三、夢の引用形式についてみれば、『要略録』にはいずれも和文体、漢文訓読体の両方に用いられる「中性的な」形式⁴¹を用いているのに対し、『冥報記』には和文体の形式と漢文訓読体、中性的な形式が混在している。

一のように原文に忠実たらんとする態度は、ただ単に「見」と「見る」だけでなく、先に見てきた、「キタル系」の訳語にも見られる。

表 7 A 類用例の語形対応（巻二、四、六、七：要略録）

語 形	用 例	対応関係	用例数	計	%
～キタル	出来・出来ル	2—2	1	4	9.30%
	還来ル	2—2	2		
	寄来・寄来ル	2—2	1		
～テキタル	将来・持来ル ⁴²	2—2	4	4	9.30%
キタリ～	来下・来下ル	2—2	3	4	9.30%
	来迎・来臨ム	2—2	1		
キタル I	来至→来ル	2—1	5	10	23.26%
	来下→来ル	2—1	2		
	来到→来ル	2—1	1		
	来儀→来ル	2—1	1		
	来謁→来ル	2—1	1		
キタル II	用例略	1—1	21	21	48.84%
計				43	100%

⁴⁰ 先に注 30 で集計から除いた和文体の「イデク」6 例も、漢文訓読体の「イデキタル」が混在しており、和文体と漢文訓読体を拉し来たった観が強く、巻七中『要略録』を出典とする翻訳話との間の文体的な落差が大きい。因みに、「今昔の撰者は、多少の誤訳は含みながらも、まずは無難に『要略録』の翻訳に成功しているが、その一方で、唐臨の『冥報記』に対しては悪戦苦闘、その翻訳話のほとんどすべてに誤読や誤解が見られ、文意不通とさえなっている部分が少なくない」（池上洵一 1979：419 頁）という指摘ももっぱら翻訳態度に帰すべきではなく、訳者の言語能力の違いとして考えることが妥当なように思われる。

⁴¹ 夢の引用形式の分析については、山口佳紀（1964）の考えと用語に従った。

⁴² 「モテキタル」には、原文の「将来」のほかにも、「将」の同義語「以」、「賁」をも含めた。

表 8 A 類用例の語形対応 (巻六、七：冥報記)

語 形	用 例	対応関係	用例数	計	%
～キタル	入来・入来ル	2—2	1	4	21.05%
	送来・送来ル	2—2	1		
キタリ～	来入・来入ル	2—2	1	1	5.26%
	来(寄)宿・来(寄)宿スル ⁴³	2—2	1	1	5.26%
キタル・キタリテ	用例略	1—1	15	15	78.95%
計				19	100%

表 9 A 類用例の語形対応 (巻九：冥報記)

語 形	用 例	対応関係	用例数	計	%
～キタル	出来・出来ル	2—2	1	1	2.94%
～テキタル	将来・持来ル	2—2	1	1	2.94%
キタリ～I	来至・来り至ル	2—2	1	4	11.76%
	来坐・来り坐ス	2—2	2		
	来過・来り過グ	2—2	1		
キタリ～II	来→進ミ来ル	1—2	1	1	2.94%
キタル・キタリテ	用例略	1—1	27	27	79.41%
計				34	100%

表 7 と表 8、9 を見比べると、『冥報記』を出典とする翻訳話のなかでの語形上の一致する割合はほぼ 100% 近くあるのに対し、『要略録』では一致しない割合が 23.26% あり、ここからも、『要略録』の訳者がより自由な表現を用いようとする姿勢が窺われる。

以上のことをふまえて、全体的に、『要略録』の訳者は、ほぼ原典を忠実に訳しながらも、かなり自由な表現を多く用いたのに対し、『冥報記』の訳者は律儀なまでに原典に忠実であり、『要略録』ほど自由な表現を用いていない、ということがいえそうである⁴⁴。

しかし、以上のような相違点よりも注目したいのは、「忽見・不見・夢見・見」の訳語のなかで、「不見」の訳語のように、明らかにいわゆる「和漢混淆文型」や「語結合」⁴⁵のような表現があるということである。『要略録』の「不見」の訳語は次の通りである。

- ・不見：搔消ツ様ニ失ヌ
- ・不見：失ヌ
- ・不見：失テ不見ズ
- ・不見：不見ズ

⁴³ 「比来寄宿者」を「来宿」と誤解したもので、便宜上 2 字対 2 字として処理した。

⁴⁴ 本稿の用いた資料とその訳語で見る限り、『要略録』と『冥報記』を出典とする説話の訳者は同一人物とするには文体意識、翻訳態度に隔たりが大きく、同一人物でない可能性があること、仮に同一人物とした場合、他の人の潤色を経ている場合とそうでない場合の違い、或いは同一人物でも時期が相当離れていたなどの要因も考えられるが、『今昔物語集』の撰者の人物像、編集の実態がまったく解明されていない現状では、川口久雄 (1959) の指摘のとおり、語学力もまちまちな複数の僧侶による集団編輯の可能性がもっとも蓋然性の高い説ではないかと考える。

⁴⁵ 「語結合」の例は、「不經幾程」、「且又」、「兼又」、「乎如何」などがあるという (峰岸明 1986 : 93 頁)。

- ・不見：不見ズ成ヌ

全五種類の訳を通してみると、「失ス」を共有している形式は三つ（内一例「不見ズ」と重なる）、「不見ズ」を共有する形式も三つ（内一例「失ス」と重なる）、形式においては互角の分布を示すが、用例は前者の4例に対して後者の2例となる（折衷例は便宜上除いた）。一方、『冥報記』の「不見」の訳語は次の四種類である。

- ・不見：无クシテ
- ・不見：失テ不見ズ
- ・不見：不見ズ
- ・不見：不見ズ成ヌ

この四種類のうち、「不見ズ」を共有する形式は三つ（内一例は「失ス」との折衷例）形式においても、用例（折衷例を除いて5例）においても「无クシテ」の1例より優勢である。しかも『要略録』の翻訳話では、「失ス」を中心に表現を選択しているのに対して、『冥報記』の翻訳話では「不見ズ」を中心に表現を選択しているという対照的な分布になっている。これは「不見」の訳語で見限り、両者の文体意識の差として解釈されるべきであろうが、こうした両者の違いを超えて共通して認められるのは、「失ス」と「不見ズ」という、一方は和語、一方は漢文訓読語と言えないまでも、原典に忠実な翻訳語を組み合わせた表現が両者共通して用いていること、それを通して窺われる両者の文体意識の共通点である。「失テ不見ズ」は意味的には同語反復といってもよいほど、意味に近いものであることはわざわざ指摘するまでもない。それを敢えて組み合わせたところに、やはり漢文訓読識の「翻訳」ではなく、より和文脈に近づけようとする文体意識が現れているのではないか。そして、「不見」のもう一つの訳語として「不見ズ成ヌ」も同じ意識の一端として理解してよさそうである。漢語なら「不見」だけでも十分意味的に含意されるところの「変化・～ナル」を、わざわざ「不見ズ」の連用形に「ナル」をつけることによって「造語」するのも、中止の場合は「无クシテ」を用いるのも、恐らく「不見ズシテ」という語形を忌避しようとしたことであろう。とにかくこの四種類の形式のうち、「不見ズ」だけは原文に忠実たんとするが、他の三つはいずれも漢文訓読体から一線を画そうとする跡がはっきり見てとれる。『要略録』の例も同じである。両者共通の「不見：失テ不見ズ」、「不見：不見ズ成ヌ」はいうに及ばず、「不見：搔消ツ様ニ失ヌ」は「失ス」に更に「搔消ツ様ニ」のような和文脈由来の表現をかぶせるのは脱漢文

訓読体の意欲の最たるものであろう。「不見：失ヌ」も訓読からの距離は大きい。残るは原文に忠実たらしとする「不見：不見ズ」1例のみである。このような態度はこれまで「キタル系語彙」と「有テ」の用法については、ほぼC類の用例を中心に見られていたことでもあるが、しかしこと「不見」の訳語において、和文脈の語形と翻訳語の語形の「和漢混淆文型」の出現までもたらししたところに、三者の間に通底する文体意識、その反映としての第三の文体、和漢混淆文体の存在を窺わせるものと考えられる。

6. 終わりに

今昔物語集の巻六、七、十にある翻訳話の翻訳態度については、これまで「翻訳態度・書承態度は、概ね出典に忠実である」（山口佳紀一九六八：四四五頁）とされ、本稿もそれを否定しないが、出典に忠実な翻訳話における「来・有・忽見・不見・見」のような説話常用語について、その訳語を調べ、これらの説話の文体が原典にどの程度左右されるものなのかを見てきた。そして、限られた語彙ではあるが、その訳語は原典に左右される一面と、必ずしも原典に縛られない一面があることが明らかになった。これら「来」、「有」、「見・不見」は、原漢文だけでなく、今昔物語集でもそれに相当する語彙として使用頻度の高いものであり、説話の語り口、構造、場面の展開にほとんど欠かせないものである。そして、この一連の語彙の訳語をめぐるのは、『要略録』と『冥報記』を出典とする翻訳話の間で、同一訳者に帰するにはいささか躊躇いを感じざるを得ないような相違点も多々見られた。しかし、そうした相違よりも、この一連の語彙の訳語を通じて、同一訳者なら個人的な文体の揺れ、別の訳者ならなおさら個人的な文体の相違点を越えたところの共通の文体意識が認められたことは、このような文体意識の反映として、やはり漢文訓読体でもなく、和文体でもない、かといって必ずしも記録体ともいえない、和漢混淆文体ともいべき文体の存在を想定しなければならず、それが今昔物語集の「文体基調」の一部をなすのではないか⁴⁶。「来・有・忽見・不見・見」の訳語だけ見ても、『今昔物語集』には、「出典の表現を受けついで文体層と撰者自身の文体層」（山口仲美（一九七〇）、五六頁）がさまざまな形で交錯しつつ、一つのバラエティ豊かな文体を形成しているのである。

⁴⁶ 山口佳紀（1966）、山口佳紀（1968）のように、撰者は一人であることを前提に、今昔物語集撰者の「文体基調」を強調する向きもあるが、本稿は、訳者を撰者と同一視してもしなくても、第四節で示したような訳者の補訳した表現はむしろ特定の個人を超えた、より一般的な文体の一部の存在を想定する。

最後に、本稿は原典としていずれも中国で編纂された説話集という制約のもと論を進めてきたが、漢訳仏典に出典を持つ翻訳話との間の比較検討は、今後の課題として残っており、他日を期したい。

参考文献：

- 池上洵一（1979）「中世説話文学における『三宝感応要略録』の受容」、『神戸大学文学部三十周年記念論集』、神戸大学文学部編輯発行、1979年10月、407-431頁。
- 石垣謙二（1941）「語法より觀たる今昔物語—『が』『の』の用法二三について—」、『国語と国文学』昭和16年10月号、176-191頁。
- 岩淵 匡（1970）「今昔物語集における翻訳の問題」、『早稲田大学教育学部学術研究—人文科学・社会科学篇』第十七号、213-230頁。
- 大坪併治（1958）「小川本願經四分律古点」、『訓点語と訓点資料』別刊第一。
- 春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』、斯道文庫・岩波書店。
- 加納協三郎（1938）「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サへ」、『国語と国文学』昭和13年10月特輯號、155-172頁。
- 川口久雄（1959）「今昔物語集説話の形成と編集—成立の問題—」、『国文学解釈と鑑賞』昭和34年6月号、2-9頁。
- 小池清治（1981）「今昔物語集本朝部『来』字の訓法——キタルとク——」、『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』、大修館書店、225-250頁。
- 小林芳規（1964）「漢文訓読史研究の一試論」、『国語学』第55輯、1-35頁。
- 小峯和明（1979）「前田家本『三宝感応要略録』と『今昔物語集』」、『説話文学研究』第14号、51-61頁。
- 後藤昭雄（2007）『金剛寺本三宝感応要略録の研究』、勉誠出版。
- 桜井茂治（1960）「平安・院政時代における『複合動詞』」、『国語と国文学』、昭和35年7月号、58-73頁。
- 佐藤武義（1976）「翻訳語としての万葉語—『春』の複合語を中心に—」、『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』、明治書院。
- 築島 裕（1965～1967）『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の国語學的研究』、東京大学出版会。
- 築島 裕他（1992）『最明寺本往生要集（訳文篇）』、汲古書院。

- 築島 裕他 (2003) 『最明寺本往生要集 (索引篇)』、汲古書院。
- 中田祝夫 (1958) 『古点本の国語学的研究 (訳文篇)』、講談社。
- 東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編 (2003) 『平安時代複合動詞索引』、清文堂、2003 年。
- 藤井俊博 (2003) 『今昔物語の表現形成』、和泉書院。
- 堀田要治 (1941) 『『如シ』と『様ナリ』とから見た今昔物語集の文章』、『国語と国文学』第 18 卷第 10 号、157-175 頁。
- 馬淵和夫 (1959) 「今昔物語集における言語の問題」、『国文学解釈と鑑賞』昭和 34 年 6 月号、25-34 頁。
- 峰岸 明 (1986) 『平安時代古記録の国語学的研究』、東京大学出版会、91-92 頁。
- 山口仲美 (1970) 「今昔物語集の文体について (I) —直喩表現の分析から—」、『国語と国文学』昭和 45 年 11 月号、43-58 頁。
- 山口仲美 (1970) 「今昔物語集の文体について (II) —直喩表現の分析から—」、『国語と国文学』昭和 45 年 12 月号、31-47 頁。
- 山口仲美 (1976) 「説話文学の表現—総論—」、『日本の説話 7 言葉と表現』、東京美術、283-308 頁。
- 山口佳紀 (1964) 「今昔物語集の漢文訓読文体と和文体 —夢の引用形式をめぐる—」、『国語研究室』(東京大学国語研究室) 第三号 (『古代日本文体史論考』(有精堂、1993 年、) に補訂採録、346-370 頁)。
- 山口佳紀 (1966) 「今昔物語集の文体基調について —「由 (よし)」の用法を通して—」、『国語学』第 67 輯 (『古代日本文体史論考』(有精堂、1993 年) に補訂採録、371-402 頁)。
- 山口佳紀 (1968) 「今昔物語集の形成と文体—仮名書自立語の意味するもの—」、『国語と国文学』第 45 卷第 8 号、昭和 43 年 (『古代日本文体史論考』(有精堂、1993 年) に補訂採録、444-474 頁)。
- 山口佳紀 (1993) 『古代日本文体史論考』有精堂、1993 年。
- 山田 巖 (1941) 「今昔物語集に於ける和漢両文脈の混在について」、『国語と国文学』第十八卷第十号、142-156 頁。
- 拙 稿 (2012) 「上代語の「〜来^く」と「〜行^ゆく」の接辞化とその周辺—事態と事態の実現の仕方を中心に—」、影山太郎・沈力編集『中日理論言語学研究の新展開 3・語彙と意味』、くろしお出版、169-203 頁。

附録：平安時代、院政時代の訓点資料における「～来」の訓法

文献名と訓点の時代	原文	～テキタル	～キタル
西大寺本金光明最勝王経古点【3】 ¹ 平安時代初期点	即可持来（巻九）	即持（ち）て来る可し	
	汝可持此大士骨来（巻十）	汝此の大士の骨を持（ち）て来る可し	
	悲哭逆前来（巻十）		悲び哭きつつ逆へ前み来る
小川本願経四分律古点【12】 ² 平安時代初期点	持来【7】	持（ち）て来（れ）ル【5】	
			持（ち）来レ（甲巻二〇ノ一七）
		持（ち）て、～来至して（甲巻一八ノ六）	
	喚来【3】		喚ビ来して（甲巻二〇ノ五）
			喚（し）来レ（甲巻二二ノ一三）
			喚（し）来して（甲巻二三ノ七）
	取来（甲巻一五ノ二一）	取（り）て来 ^{（きつち）} ク	
石山寺藏法華経玄賛淳祐点【1】 ³ 九五〇年頃	得来（甲巻一八ノ八・九）	得て来ラマセシ	
石山寺藏本法華経義疏【3】 ⁴ 長保四（一〇〇二）年点	如競来食噉（六ノ二一）		競（ひ）来（り）て食噉するが如（し）
	将来人間博易（序品初ノ三七七）		人間に将（ち）来 ^{（き）（に）} て博易する
	持諸餽饌来者（序品末ノ五七八）	諸の餽饌を持て来（たる）ことは〔者〕	
興福寺本太慈恩寺三藏法師伝【17】 ⁵ （C 種点：巻七～巻十、承德三（一〇九九）年点、E 種点：巻一～巻六、永久四（一一一六）年移点）	何故引此語来耶（序品末ノ七六〇）	何故（に）、此の語を引て来（る）耶	
	将来【5】	将テ来（ル）E【5】	
	飛来【3】		飛（ヒ）来（リ）テE【3】
	下来【2】		下（リ）来（リ）テE【2】
	附来【4】		附 ^ツ ケ来セ ^{（キ）} C【4】
	入房来（五ノ〇〇四）	房ニ入（リ）テ来ルE	
	起〔赶〕来（二ノ〇二七）		起〔赶〕（オモフ）キ来ルE
	還来（三ノ三四四）		還（リ）来（リ）テE
	請来（五ノ四五七）		請（シ）来（リ）テE
	擎来（一〇ノ〇八八）		擎（ケ）来（リ）テC

¹ 春日政治 1943 による。なお巻十に「見有一人来：見レば一の人有（り）テ来ル」があるが、原漢文では「有」と「来」は複合したものではなく、他の 3 例と異なるため、除いた。

² 大坪併治 1958 による。「喚来」3 例のうち、「喚ビ来して」（甲巻二〇ノ五）、「喚（し）来して」（甲巻二三ノ七）が 1 例ずつあり、参考のために挙げておいた。

³ 中田祝夫 1958 による。

⁴ 中田祝夫 1958 による。

⁵ 築島裕 1965・1967 による。他に「所以有此文来者：此の文の有りて来（れる）所以〔者〕」があるが、前注と同じ理由により除く。「将来」他 4 例：「将来将来（五ノ〇七五） 将 テ来（ラ）シメヨ E」、「不将～来（五ノ三三八） 将テ来（ラ）不ヤ E」、「将来（五ノ三一九） 将テ来（レ）リ E」、「将来（五ノ五二六） 将テ来（ル）ニ E」、「飛来」他 2 例：「飛来（九ノ二一七）・飛（ヒ）来（リ）テ C」、「飛来（九ノ二二一） 飛（ヒ）来（リ）^{（キ）} C」、「下来」他 1 例：「下来（三ノ〇七三） 下（リ）来（リ）シ E」、「附来」他 3 例：「附来（七ノ三三六） 附（ケ）来スコトラ C」、「附来（七ノ三五八） 附（ケ）来（ス）コトラ C」、「附来（七ノ三五八） 附ケ来スコトラ D」。

石山寺藏本大唐西域記【4】 ⁶ 寛元元（一一六三）年点	競来残伐（五ノ四八〇）		競（ひ）来て 残（ひ）伐レドモ
	乗波而来（七ノ二六〇）	波に乗（て）[而]来（る）	
	上軍王後來（三ノ〇九八）	上軍王後 ^オ レて来レリ	
	遂将盲人而来対旨（三ノ二五六）	遂に盲人を将（て）[而]来て旨を対フ	
最明寺本往生要集（4例） ⁷ 院政時代末期又は鎌倉時代初期加点点	无所從來【2】	從（り）て来る所無し（中65オ4）	
	合来（上36ウ2）		合せ「-」来 ^{（来）} る
	持来（中85ウ4）	持（ち）て来る	
用 例 数	46 例	24 例	22 例

- 凡例：
- 一、原則として原漢文の複合動詞二字を示したが、前項動詞の目的語を間に動詞が連続する場合などは適宜語彙を補った。ただし長い目的語の場合は～によって代用させた。
 - 一、同じ資料に同一語形が複数ある場合は最初の語形と用例数（【 】内に）を示した。それ以外はすべて1例である。
 - 一、漢字は現行の字体に改めた。

参考文献：

大坪併治 1958「小川本願經四分律古点」『訓点語と訓点資料』別刊第一、昭和三十三年。

春日政治 1942『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』、斯道文庫・岩波書店。

築島 裕 1965-1967『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究』、東京大学出版会。

築島 裕他 1992『最明寺本往生要集（訳文篇）』、汲古書院。

築島 裕他 2003『最明寺本往生要集（索引篇）』、汲古書院。

中田祝夫 1958『古点本の國語學的研究（訳文篇）』、講談社。

築島 裕 2007～2008『訓点語彙集成』第一卷～第五卷、汲古書院。

⁶ 中田祝夫 1958 による。

⁷ 築島裕他 1992 による。読み下し文の本体は朱点、「」内は墨点。他 1 例は、「无所從來(下 12ウ 1):從(り)て来る」。